異世界には刀の花束を

イタズラ小僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界には刀の花束を

【Ｎコード】
Ｎ５９９３Ｑ

【作者名】
イタズラ小僧

【あらすじ】
※連載は中止になります。ただいま「異世界には刀の花束を【改訂版】」を執筆しているので、よろしければご覧ください。ただし、気分次第で再開する可能性あり。

第0話　プロローグ（前書き）

どうも、初投稿になります。
若輩者ですが、がんばっていこうと思いますのでよろしくお願いします。

※2／5　話数変更

第0話　プロローグ

目の前に迫る闇。
周りの色は消えていき、世界は闇に染まる。
闇の中には自分以外の存在が無い。見えないや認識できないのではない。
無いのだ。
ここに存在しているのは自分だけだった。

やがて、闇は自分の身体にまで襲(おそ)いかかってくる。
いや、表現が違う。襲いかかってくるのではない。身体を包み込んでいた。
それはどこか温かく、同時にどこまでも冷たかった。
闇はすぐに身体(からだ)を染めていく。
気づけば残っているのは顔だけになっていた。
後は闇だけが広がる。

広がる？
その表現もおかしい。そもそも、ここには空間など存在しない。
あるのは今の自分の意識だけ。それ以外は闇。

闇の中で俺はぼんやりとしていた。

闇に染められる恐怖はなく。かといって、快楽があるわけでもない。
感情が死んでいた。

ここにあるのは現象を認識する自分だけ。認識するだけの自分が感情を持つことはない。
故(ゆえ)にこの闇の中には自分しかなかった。
いや、最早(もはや)、自分という概念(がいねん)すら消えかかっている。自分は何者でどうしてこんな状況になっているのだろう。
しかし、その疑問はすぐに闇に消える。その疑念すらもここでは存在を許されない。

そして、闇は顔すらも染め始める。

視界が無くなる。

音が無くなる。

味が無くなる。

臭いが無くなる。

温度が無くなる。

感覚が無くなる。

最後に俺の意識が無くなった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「――――！」

闇から俺の意識が開放される。同時に五感が復活する。
世界はきちんとした色で染められている。
だというのに、俺の目の前にあるノートはどういう訳か真っ白なのである。普通ならシャーペンやえんぴつで書かれた文字があるはずなのに、俺のノートは購入したときのままの白紙であった。

「――――！！」

おかしい。
ノートが白紙になるなどとあり得るだろうか。
誰かに消されたような記憶もない。
これはどういうことだろうか。
まさか、時間の逆行なのか？

「――――ッ！！」

あり得ない。そんなバカな。
時間の逆行なんてＳＦ的なあり得るわけがない。
じゃあ、なんだ？

「――――！？」

もしかして、夢なのか？これは俺が見ている夢の一種なのだろうか？
実は俺は寝ていて、ノートに何も書いていない夢を見ているだけなのではないだろうか。

いや、逆もあり得るな。
俺がノートに書いたというのが実は夢でこちらが現実なのではないだろうか。
「胡蝶(こちょう)の夢・・・・・・か」
「よ～し、お前がケンカを売っているのはよぉく分かった」
「へ？」
俺はすぐ近くから聞こえてくる声に、間の抜けた声を上げてしまった。
声の方を見るとそこには担任がいた。
「神林(かんばやし)は放課後に職員室に来い」
先生が教壇(きょうだん)の方へ戻っていると丁度、チャイムがなった。授業終了の合図だ。それはいい。
何故、こうなった？
さっきまで授業だった→俺、寝てた→先生にバレた→放課後、職員室→担任は体育会系→ＥＮＤ☆
待て待て、落ち着こう。深呼吸だ、深呼吸。ヒッヒッ、フー。ヒッヒッ、フー。
よし、落ち着いた。
さて、呼び出しのときの対処法は、逃げるのが一番である。
後が怖い？今更だから気にしない。
つーことで、帰る。
俺―――神林　龍哉(たつや)は忍びの如く、教室を後にした。

◆◇◆◇◆◇◆◇

静寂に包まれている道場。その中で俺は精神統一を行っていた。
と言っても、そこまで堅苦しいものでもない。簡単に言うと集中しているだけだ。
いや、自分の中の小さな変化を探し、身体の調子を確かめるという表現の方が正しいだろうか？
ま、細かいことは気にしない方向で。

「ふぅ」

さて、一段落した。
そろそろ、門下生達がやってくる頃だろう。俺は立ち上がり、竹刀を準備する。
一応、師範代だし、門下生より先に準備しておくのが俺の信条だ。
別に先生に呼び出されたことから逃げるためではない。決して逃げるためではない！（大事なことなので二回言いました。）

指定の位置で正座をしていると門下生達がやってきた。軽く礼をしながら、道場に入ってくる。
その後に俺の姿を見つけ、再び礼をする。俺には礼をしなくてもいいんだけどね。
しばらくすると、それなりの人数が揃う。
この道場———というより、神林流はかなり大雑把である。来る者は拒まず、去る者も拒まず。しかし、まぁ、教えるのは基本だけなんだけど。

「全員、整列！」

俺が声を張り上げると、どこの軍隊だよ（笑）とツッコミを入れたくなるくらいに揃って整列をする。そこまで、厳しくした記憶はないんだが・・・。
いつも通り、準備運動に腹筋５０回、腕立て５０回、背筋５０回を行い、鍛練に入る。
さて、今日はどんなことをしてイジ――もとい、鍛練をしてやろうかな？
ついでに言っておくと、門下生達は元ニートか元不良、元引きこもりのいずれかだったりする。
原因は俺の祖父であり、この道場の師範である神林　竜玄だったりする。
要は熱血野郎である。爺さんはニートや不良、引きこもりに更生をさせるためにいろいろとお節介をしている。そのお陰でこの道場が赤字なのは言わずもがな。

そうだ、良いことを思いついた！今日は俺の憂さ晴らしをしよう。
うん、それがいい。
門下生達のおおよそ真ん中に移動する。

「それじゃ、全員かかってこい」

笑顔で言うと、門下生達のテンションがかなり下がる。
全く、こちとら慈善事業ではないのだ。俺の憂さ晴らしくらい付き合えっての。
すると、近くに居た５人が絶妙な時間差で攻撃をしてきた。それに合わせて周りの門下生達も動き始める。
ま、全員に襲われたところで負けるような俺ではないけど。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「今日はよく動いたなぁ」

俺が風呂を上がって本を読みながらくつろいでいると、爺さんがやってきた。

爺さんは真剣な雰囲気を纏(まと)いながら、俺の正面に正座をした。

「お主はまたそんなもん読んでおるのか」

俺が読んでいる本はギリシャ神話の本だ。

一度、友達に薦(すす)められたのだがこれが意外におもしろい。神様の話にしてはかなり人間くさい。まぁ、作ったのが人間だから仕方ないとは思うが。

ちなみに最近はケルト神話なんかも読んだ。

「龍哉に渡したいものがある。道場に来てくれ」

それを伝えると、立ち上がり道場の方へと歩いていった。

俺は読書を中止し、爺さんの後を追った。

道場に着くと、昼間に1人で居たときよりも静かに感じられた。ひんやりとした雰囲気は、背筋に寒さを感じさせ嫌悪感(けんおかん)を覚える。

「そこに座れ」

爺さんはいつの間にやら、師範専用の位置にいた。

そして、一振りの刀を自分の前に置いた。

「神林に伝わる宝刀を龍哉に預けようと思う」

爺さんはハッキリとそう言った。普通なら大喜びしていいのではないだろうか。
自分の師匠から宝刀を受け取ると言うことは、実質的な免許皆伝(めんきょかいでん)である。
純粋にそれだけの意味だったら、俺も大喜びできたのに…。

「それで今度はいくらの刀を買ったの？」

時間が止まった。

「神林に伝わる宝刀を龍哉に預けようと思う」

「スルーかこの野郎。というより、何本目の神林に伝わる宝刀だよ」

この爺さんは刀の収集癖があり、刀を頻繁(ひんぱん)に購入している。しかも、家族にばれないように宝刀という名目で俺に古い刀を預けてくる。
俺の部屋のクローゼットは決して開けられない。一応は模造刀(もぞうとう)だが素人目には同じである。一度、部屋に遊びに来たヤツがふざけてクローゼットを開けて全力で帰ってたなぁ。

「頼む、龍哉。老後の楽しみは、これしかないのだ」

爺さんは少しだけ俯いて、涙を見せる。
さすがに可哀想になってきた。

「分かったから、泣くなよ」

俺の言葉を聞くと途端(とたん)に顔を上げてニヤリと笑顔を浮べた。
騙(だま)しやがったな、このクソじじぃ！

「さすが龍哉じゃな。男に二言はあるまい？」

「……分かったよ」

今更、一振りや二振り増えたところで大差はない……と思う。

俺は部屋に戻るとすぐにベッドに倒れ込んだ。
爺さんのせいで余計な精神力を使った。
それにしても、異常なくらいに眠い…。
こんなに体力がないわけが……。
ダメだ、考えるのも辛い……。
きょうはねよう……。

俺の意識はブラックアウトした。

第0話　プロローグ（後書き）

誤字・脱字などありましたら、お教えいただくとありがたいです。
感想は大歓迎です！

第1話　メリリア・リス・コーティス（前書き）

更新は月3くらいが目標です。

※2／5　話数変更

※2／20　修正

第1話　メリリア・リス・コーティス

気がつくと、知らない枕(まくら)だった。
そう、俺の枕はこんなに硬くない。俺の枕は通販で買った低反発枕だ。それを使って以来、その枕以外では寝付きが悪い。決して寝れないというわけではないが。

「ここはどこなのだろうか」

枕の違和感で目を覚ますと、明らかに俺の部屋ではなかった。部屋は簡素(かんそ)な造りで、俺が寝ているベッド以外は小さな棚(たな)が1つあるだけ。
窓から見える景色は、畑で労働を行っている人々だった。労働者の服装はなんとも地味な色だった。
ま、どうでもいいが。
1つだけ、気づいたことがある。人間ってあまりにも意味不明な状況だと、逆に冷静になれるって本当だったんだ。
これは意外と使える情報である。悪戯(いたずら)などを行うときはほどほどにしないと、相手のリアクションが薄(うす)くなるのだ。気をつけなければ。

さて、いい加減に現実逃避も止めるべきだろう。
とりあえずは現状把握が優先だ。そうと決まれば行動あるのみ。
俺はベッドから起き上がると、床に置いてあった物に気がついた。
大きな麻袋(あさぶくろ)である。口からは刀の柄らしきものが見える。
中を確認すると、やはり刀だった。しかも、俺のクローゼットにあるはずの爺さんから貰(もら)った刀、百十一振り。

ん？待てよ。模造刀を一振り5万と考えて…。
ちょい待てや、ゴラァ。555万円って何だよ！あのじじぃはどこ

にそんな金を蓄(たくわ)えてたんだよ！
くっそ、今まで気にしてなかったが、一振りにつき１０００円でも貰えばよかった。
などと、俺が後悔していると部屋に近づいてくる気配がした。

俺は麻袋の中から一振りを適当に選び左手で持つ。もちろん、抜刀できる体勢で。
模造刀なので切れはしないと思うが、殴ることは可能だ。
部屋にやってきたのは、何ともひ弱そうな女性だった。肌は白く、腕は華奢(きゃしゃ)で少し力を入れて握れば折れそうなほどに。髪は水色で長く、腰まで伸びていた。瞳は藍色(あいいろ)でどこまでも深く。そして、すごい美人だった。
女性は俺の姿を見ると、驚いた表情をした。
まぁ、誰だって刀持って自分に向かっているヤツがいたら驚く――――

「ダメですよ、ちゃんと寝てないと！」

そっち！？
え？え？
俺、刀持ってるんですけど？
え？俺のがおかしいの？
え？え？え？
よし待て、落ち着こう。深呼吸を…。
このネタはもうやった！
と、俺が混乱していると女性は手に持っていた盆(ぼん)を棚の上に置き、俺に近づいてくる。
その行動で俺は再び警戒をする。俺の警戒を感じ取ったのか、女性は動きを止めた。

「私はあなたに危害を加えるつもりはありません。どうか、その剣

を下ろしてください」

「分かった」

俺は素直に刀を脇(わき)に置いた。
すると、女性は意外そうな顔をした。

「私を信用するのですか？」

「え？信用できないの？」

俺は本気で聞き返した。
当たり前である。もし、彼女が俺に危害を加えるつもりなら、寝ている間に手錠(てじょう)でもなんでもしておけばいい。それが無いと言うことは、少なくとも殺される可能性は低い。
利用される可能性がないわけじゃないが。
俺が刀を構えたのは、条件反射に近いものである。

「いえ、そういうわけではありませんけど…」

女性はどこか納得のいかなそうな表情をする。
しかし、すぐに表情は明るいものへと変わった。

「昼食を持ってきました。お食べになりますか？」

女性は棚に置いている盆を持ってくる。
乗っているのは、何とも言い難い料理（？）であった。
この女性(ひと)、不器用だな。俺は瞬時(しゅんじ)に悟(さと)った。

「いや、今はそこまで腹が減ってないし、遠慮しておきます」

「そう…ですか」

女性はとても残念そうな表情になる。

料理、食べてもらえないんだろうなぁ。さすがに可哀想になってくる。

「あの、やっぱりもらえますか？おいしそうだったんで」

言うなり、女性は急に笑顔になった。

なんで俺は意味不明な状況下で、他人に気を遣わないといけんのだ。

ちなみに女性の料理は、見た目ほど不味くはなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

食べている時にいろいろと質問したお陰で色んな情報を得られた。

まず、ここは俺の知る世界ではない。

知らない地名や国名が出てきてたし。日本が存在していないことも確認した。

俺がいるここはメリオ村と言って、首都には近い田舎らしい。

それと、だいぶファンタジーな世界のようだ。

魔法、魔獣、精霊とかがあるらしい。

この時点で異世界だろうと確信した。

さらには種族も様々であった。

大きく分けて魔族、天族、竜人、森人、獣人、人間の６種いるそうだ。
細かく分類すればさらに数は増えるらしいが、面倒なので聞いてない。

最後に女性はメリリアさんと言うらしい。正式にはメリリア・リス・コーティスさん。天族だ。
メリリアさんは王家直属の部隊“フェルテイナ魔導師団”に所属しているそうだ。
すごいですね、と誉めたら、そんなことないですよ、と照れながら応えていた。

メリオ村はメリリアさんの故郷で、休暇なので遊びに来ていたそうだ。と言っても家族は首都に居て、村の様子を見に来ただけ。
そして、この家はメリリアさんの元実家だそうだ。
俺は来る途中の森に落ちていて、発見し保護したらしい。それから２日は寝ていたそうだ。
もしかして、場合によっては俺は森で死んでいたのか？それを考えると、メリリアさんには感謝してもしきれないな。

それと俺のことは記憶喪失だと説明した。常識とか知らなくても、怪しまれないだろうし。
あと、髪と眼の色はこの大陸では珍しいようだ。別の大陸にはいるそうだが、こちらではあまりみないとのことだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「えっ、メリリアさんは首都に戻っちゃうんですか？」

「ええ、仕事もありますので」

いきなりそんなことを言われた。仕事があるので、これから首都に向かわないといけないらしい。
さて、どうしたものか。メリリアさんが首都に行くとなると、俺は行き場がなくなってしまう。

「一緒に来ますか？」

それも良い案なんだけど…。
俺は身分が怪しい。首都なんて行ったら、色々と面倒な気がする。
いや、絶対に面倒になる。
そんなことでメリリアさんに迷惑は掛けたくない。かと言って、ここに居てもどうにもできない。

「うーーん、出来れば首都は遠慮したいなぁ、と思うんですけど」

「なら、ここで暮らしますか？」

「いいんですか？」

メリリアさんの提案は非常にうれしかった。
田舎なら目を付けられることも、あまりないだろう。それでいて、首都に近いなら元の世界に戻る情報も集まりやすいはず。
問題はどうやって生きていくかだな。
この世界も貨幣のやり取りで生活を行うみたいだし、俺に出来る範囲で稼ぐ方法があればいいんだけど。

「それなら、ギルドに登録してみたらどうですか？」

「ぎるど？ギルドってあのギルドですか？」

メリリアさんに聞くと、そんな返事が返ってきた。
ギルドというと、ゲームに出てくることの多いあのギルドだろうか？依頼を受けてその依頼を達成したら報酬を得る、あれ？
モンスターもいるって言うし、そんな感じだろう。

「どのギルドかは分かりませんけど、おそらくそのギルドだと思いますよ」

「でも、そんなに簡単に登録できるんですか？」

「そうですね、旅の人や他国の国外追放された者でもなれます」

国外追放者って犯罪者でもなれるのかよ。
要は強ければＯＫってことか。それなら、俺でもいけるかな？

「それじゃあ、ギルドの登録方法を教えて貰ってもいいですか」

「はい。じゃあ、ギルドの登録のために首都に向かいましょう」

って、結果的に首都に行くことになるじゃん。
いいけどさ。

「あ、出来れば姿を隠しておきたいんで、ローブとかありますか？」

怪しいので姿は隠すに限る。
そう言うと、メリリアさんは緋色（ひいろ）のローブを持ってきてくれた。
とっても高価そうだったのだが、軽い調子でそれをくれた。本人曰く「使わないものでしたので、構いませんよ」とのこと。
本当にありがたい。それじゃ、首都に行くとしますかね。

◆◇◆◇◆◇◆◇

首都ローリアル。
フェルテイナ王国の首都で、とても活気がある商業都市。１０００万以上の民が生活を行っている都市である。
と、メリリアさんから説明を受けた。
メリリアさん家で地図を使って確認したが、この世界の大陸は元の世界よりもかなり大きい。首都の人口が１０００万人以上のフェルテイナ王国でも、この世界じゃ小国に該当する。
ちなみにメリオ村からは徒歩で６時間くらい、馬では２時間半くらいだそうだ。
俺はメリリアさんの馬に乗って首都にやって来た。馬は尻が痛いと思っていたが、さほど痛みはなかった。
メリリアさんが上手なのだろうか。

「王家直属って聞いてたから、すごいとは思ってましたけど、あそこまですごいなんて…」

俺が驚いているのは、さっきの検問での出来事だ。
検問ではローリアルに入る者全てに検査を行っていた。と言っても、身分証明書を提示するだけだ。
しかし、残念ながら俺は身分証明書を所持してはいない。持っているのは、俺と一緒に落ちていたという刀だけだ。
そこでどうしたものかと悩んでいると、メリリアさんが大丈夫です、と言って検問している兵士の許へと行き、話しかけた。
話しかけられた兵士は最初、戸惑っている様子だったが、身分証明書を見た途端に動きがぎこちなくなり始めた。
その動きのまま兵士は奥へと行き、しばらくすると上司らしき人が出てきた。その人もぎこちなくメリリアさんと話していると、俺の

姿を一瞥した。
その後、メリリアさんが戻ってくると、兵士達はすんなりと俺を通した。
これが噂の上の圧力かっ！と俺は驚愕していた。
「いえいえ、ただ私の客人だと説明しただけですよ」
メリリアさんは笑顔で俺に応えていた。
それであんなに兵士達は怯えるかっ！
王家直属ってのは、想像以上のものらしい。

「ここです」

メリリアさんが立ち止まると、そこには立派な建物があった。
学校の体育館くらいはあるのではないだろうか。
出入り口からは夜だと言うのも関係なしに、先ほどから多くの人々が出入りしている。中には獣人と思しき人もいた。
俺が感心していると、メリリアさんが建物の中へと入っていく。
その後を追って俺も中に入る。

中はものすごい喧噪だった。注文の飛び交う声や笑い声、叫び声や食器のぶつかる音が鳴り響いていた。
その光景に圧倒される。
元の世界では見たことのない光景だった。それはとても愉しそうで、俺もこの中に入れたらなぁと思う。
しかし、まぁ、俺の願いは叶わなかった。

「メリリアです。この方のギルド登録をお願いしたいのですが」
受付にメリリアさんが名前を告げた途端に、建物内は静かになる。

誰もが動きを止めて、メリリアさんの方を見ていた。
受付の女性は怯えたように、メリリアさんが提示している身分証明書を確認し奥へと消えていった。
その間に周りの動きは一切(いっさい)無く、時間が止まっているかのようだった。
さっきの検問での出来事で充分に驚いていたが、どうやら俺の認識はあまかったらしい。もしかしなくても、俺はとんでもない人物に拾われたのではないだろうか。
俺が少しの間、考えに耽(ふけ)っていると奥からさっきとは別の女性が出てきた。
どうやら、さっきの女性より慣れている人のようだ。

「では、こちらの用紙に名前を記入して下さい」

受付の女性は、一枚の紙とえんぴつ（？）を俺に差し出してきた。
紙には何か文字が書いてあるようだが、俺には読めない。

「すみません、メリリアさん。俺、字が書けないんですけど・・・」

素直に白状すると、メリリアさんは笑顔で用紙とえんぴつ（？）を受け取った。

「それでは、正確に名前を言ってください」

「神林　龍哉です」

「えっと・・・？」

俺が本名を言うと、メリリアさんは戸惑った表情をした。
どうかし――――ああ、そういうことか。

「名が龍哉で姓が神林です」

それを聞くとメリリアさんはすぐに用紙に書き始めた。
自分の名前を見てみるが、全く読めそうにない。これはどうにかして、覚える必要がありそうだ。
メリリアさんはそれを受付の女性に渡す。女性はそれを確認すると、カードを渡してきた。
カードは茶色で、黄色で大きくFと書かれてあった。
なぜ、英語？もしかして、元の世界と関係が？
あとで聞いてみよう。

「登録は完了しました。続いてギルドの説明を致(いた)します」

受付の女性の話を要約する。
まず、ギルドは予想通り、依頼――クエストを受け達成すると報酬が支払われるシステムである。
クエストは紙で木板(ボード)に張ってあり、やりたいものがあればその紙を受付に持ってくればいい。
しかし、クエストにはランクがあり、自分のランク以下か、自分のランクの1つ上のものしか受けれない。

最初はランクがFから始まる。それから、E、D、C、－B、＋B、－A、＋A、、－AA、＋AA、S、SSと上がっていくそうだ。
次に、ランクはクエストを達成すると上がっていく。ランクが一つ上のクエストを7回達成することでランクが一つあがる。逆にクエストを連続で3回失敗することでランクが一つ下がる。
それとSからSSになるには特別な審査を受けなければならない。
審査法はSSランクの人との決闘。別に勝たなくても、SSランクの人が二人以上認めればいい。

また、裏技としてランクＳＳの人からの推薦で、ランクーＡまで上げることが可能である。

そして、クエストは複数人で受けることが出来る。
複数人で受ける場合は、クエストを受注するために受付に行った者が責任者となる。クエストは責任者のランク以下のクエストしか受けれない。
しかし、複数人で行っても支払われる報酬は同じなので、あまり多くで行くと自分の収入が減るということだ。
最後にカードを紛失（ふんしつ）した場合は、再登録をしなければならない。
もっとも、ランクがーＢになるとさらに詳しいことを用紙に記入して正登録となる。正登録になれば、カードは再発行できるらしい。
やはり、強い者は残しておきたいのだろう。

「ご理解頂けましたか？」

「はい、大丈夫です」

「では、質問等がなければ今からクエストをしていただいても構いません」

受付の女性はそれを言うと、周りは気づかないくらいの息を吐いた。
この女性もメリリアさんの前では、緊張をしていたらしい。
それであの接客（？）とは、プロ根性を感じる。

「タツヤさん、今日はこちらの家に泊まってください。明日、少しだけなら時間が取れると思うので、その時に一緒にクエストに行きましょう」

メリリアさんの提案は非常に嬉しかった。周りの視線がべっとりと張り付くような感じで、中には殺気のようなものが混じってなければ、より嬉しかった・・・。

「ホントですか？よろしくお願いします」

しかしまぁ、そんな視線程度でへこたれる俺ではない。
面倒くさそうなのは無視するに限る。これ、世界の真理。

「それでは私の家に案内します」

メリリアさんはギルドの建物を後にする。
俺も続いて出て行く。

この時に気づいたことがある。
ギルドは国外追放者でも登録できる、とメリリアさんは言っていた。
しかし、ギルドは都市の中にある。検問を行っていたことから分かるように、この都市には身分証明をしなければ入れない。
つまりは国外追放者でもなれるってことは、そいつは権力者のお気に入りだ。
まぁ、何が言いたいのかと言えば。
この制度は、さほど危険なものではないということだ。
もちろん、登録したヤツが権力者を裏切るかもしれないが、その可能性は低いだろう。権力者のお気に入りでいれば、自分は犯罪者でも関係がないのだから。
だからと言って、俺は犯罪者になる気などさらさらないが。

第1話　メリリア・リス・コーティス（後書き）

誤字・脱字などは、教えていただけると幸いです。
感想は大歓迎です！

第2話　異世界の初夜（前書き）

いやー、インフルエンザって意外とつらいですね。
ということで、ただ今、絶賛インフルエンザ中です。

しかし、こんなことでめげる私ではないっ！
というわけで、第2話をお送りします。

※3／1　修正

第2話　異世界の初夜

どうしてこうなった・・・。
目の前には、机に並べられた豪華(ごうか)な料理の数々。現在進行形で増加中。
視線を少し上げると、ニコニコと笑っている男性。歳は五十代前半と推測される。
視線を俺の隣に向けると、そこには顔を赤くして小さくなっている女性。もちろん、メリリアさんである。
さて、この状況が何なのかと言えば、話は少し前に遡(さかのぼ)る。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「ここが私の家です」

ギルドの建物から、街の中心にある城にかなり近づいたところでメリリアさんが立ち止まる。
城から離れたところは已然(いぜん)として活気があるのにも関わらず、ここはかなり静かなところだった。周りの家々は明かりが点いてはいるが、騒がしい気配などは感じられない。
メリリアさんが立ち止まった家も、周りの家同様にかなり豪華な家だった。
そして、家は明かりが点いてはいるが、静かで少しだけ緊張をする。
もしかして、メリリアさん家(ち)は厳しいのだろうか。そんな考えが頭を過(よ)ぎる。

「タツヤさん？どうかしましたか？」

俺が考えているうちにメリリアさんは玄関を開け、中に入ろうとしていた。

これ以上考えても、現実は変わらないので諦めて家の中に入る。

中は外観と同じように、豪華なつくりをしていた。

高価そうな置物や絵もある。美術品に詳しいわけではないが、何となく高価だというのは解った。

「こちらです」

俺がキョロキョロと見ていると、メリリアさんは奥の扉へと進んでいた。俺はそれを慌てて追いかける。

扉をくぐると、広い応接間に出た。

「こちらに座ってお待ちください」

メリリアさんが豪華なソファーを示す。

というか、俺はさっきから豪華としか感想がない気がする。

しかし、それ以外に何て言えばいいのか分からない。こんな時にボキャブラリーが少ないと悲しくなるな。

メリリアさんは俺が座るのを確認すると、部屋から出て行った。

「場違い過ぎる」

一人の部屋でポツリと呟いた。

豪華な部屋に緋色のローブを被った男が、一人だけ座っている。なんとも華のない光景である。

メリリアさんが出て行ってから、数分もしないうちに部屋に近づいてくる気配がした。３人分の気配だ。

俺は無意識のうちに刀を近くに寄せる。
扉が開くと、メリリアさんと1組の男女がいた。男女は二人とも、人のよさそうな笑顔を浮かべていた。
「紹介します。こちらが私の両親です」
「どうも、メリリアの母のクラシスです」
「父のメルチです」
メリリアさんが言うと、男女は頭を下げて名前を告げてきた。
俺は二人が頭を下げたのを見て、反射的にローブを脱いで頭を下げた。
さすが日本人。腰が低い。
「あ、俺はタツヤ　カンバヤシです。メリリアさんにはお世話になってます」
なぜか、同じ職場の人のような挨拶をしてしまった。
それはいいんだが、クラシスさんとメルチさんはなぜか生暖かい視線を俺に向けている。
俺は何かしたのか？
「いえいえ、メリリアのことをこれからもよろしくお願いします」
「少しばかりドジなところもありますけど、優しい子ですので」
えっと……？この方たちは何をおっしゃっているのですか？
これじゃあ、まるで――――

「それで挙式はいつごろに？急かすわけではないんですけど、出来るだけ早いほうが良いと思うんですよ」

「ぶっ」

吹き出してしまった。どんな勘違いだっ！
というか、メリリアさんは顔を朱にしないでください。反応に困ります。

「お父さん、お母さんも！」

照れながらリアクションをしないでっ！こっちまで照れる。
じゃなくて！

「あの、俺とメリリアさんはそんな関係じゃないんで」

俺と付き合ってるなんて、メリリアさんは嫌がるだろう。
俺だって自分のことくらい分かってるさ。さすがにメリリアさんのような美人と付き合ってるなんて、大それたことを言うつもりは毛頭ない。

「…そうですよね」

メリリアさんはしゅんとなる。
あれ？俺は何かをしたのかっ！？
こ、ここは何かフォローを！

「やっぱり、メリリアさんにはもっといい人が「そんなことありません！」

どうせいと！？どうリアクションすれば正解！？
俺は必死に考え始める。

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて。取りあえず、ご飯でも食べたら？」

クラシスさんは俺とメリリアさんに唐突（とうとつ）な提案をする。
いやいや、原因はあなたですよ！？
だんだんと自分のキャラクターが分からなくなってくる。

こしうして話は、赤面しているメリリアさんのシーンへと戻る。
豪華な料理は完全にクラシスさんの勘違いである。
俺としてはうれしいのだが。

「さて、これで最後！」

クラシスさんは最後に大きな鍋（なべ）を机の真ん中に準備した。
かなりの量を作っているのだが、どうやらクラシスさん一人で作ったみたいだ。
これには驚きを隠せない。

「こんなに作って大丈夫ですか？」

「あはははは」

クラシスさんは笑うだけで答えなかった。
食事が始まるとメリリアさんと俺の詳しい関係を聞かれたので、勘違いを正そうと俺は奮起（ふんき）していた。
なぜか、メリリアさんは最後まで一緒に説明してくれなかった。クラシスさんとメルチさんに聞かれても、曖昧（あいまい）な答えしか言っていな

かった。
そのせいなのか、二人ともなかなか俺の話を信じてくれずに、最後まで勘違いをされたままだった。
途中から諦めていたが。

食事が終わると、メリリアさんは俺を部屋まで案内してくれた。
俺が泊まることはクラシスさんとメルチさんが即刻、ＯＫを出した。
おい、いいのかそれで。女性（メリリアさん）がいるのに。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「隣、いいですか？」

俺が部屋の窓から見える星を見ながら、考えに耽っているとメリリアさんが声を掛けてきた。
いつの間にか部屋に入っていたらしい。警戒心が薄れてきてるのか？
俺はちらりとメリリアさんのほうを見て、こくりと頷くとメリリアさんは俺のすぐ近くまでやってきた。

「星が綺麗ですね」

夜空には多くの星があり、一つ一つが光を放っていた。
よく、宝石を散りばめたようなとか聞くが、俺は今始めてその意味が分かった気がする。今までの元の世界の夜空も綺麗だったが、こっちの世界の夜空は綺麗という言葉では言い表せないくらいに魅力的だった。
そんなことを思いながら、メリリアさんの言葉に頷く。
そして、しばらく二人で夜空を見上げ、部屋には沈黙が訪れた。

「何を考えていたんですか？」
メリリアさんが空を見上げたままで質問をしてきた。
俺が考え事をしていたのはお見通しのようだ。
「今日は色々とあったなと思って」
俺は苦笑いをしながら答える。
本当に色々あった。
いきなり、異世界なんかに飛ばされるし。美人に救われるし。ギルドには登録するし。
しかしまぁ、あまりにも吹っ飛びすぎて逆に冷静なのは僥倖（ぎょうこう）だ。これで混乱なんてしてたら、明日のクエストなんて死ぬのが目に見えてるな。
……そっか、明日はメリリアさんとクエストへと赴（おもむ）くんだよなぁ。
うん、ぶっ飛んでる。
でも、もう爺さんにも、父さんにも母さんにも姉さんにも会えないかもしれない。普段は深く考えることがなかったが、離れてみて初めて分かることもある。
自分が結構、家族のことを大切に想ってたことを知る。だんだんと悲しくなってくる。
もう、会えないかもしれない。冗談でも夢でもない。紛れもない現実。
ま、それで怖気（おじけ）づくような俺ではないが。
俺は不敵に笑った。
「そうですか」

メリリアさんは俺の表情を見て笑顔を見せた。気を使われていたようだ。
そこで会話が無くなり、再び部屋に沈黙が訪れた。だが、それは決して気まずいものではなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

〜〜　メリリア・リス・コーティス　〜〜

今日は素敵な出会いをした。今までの人生の中で、最も素晴らしい出会いと言っても過言ではない。
彼に出会ったのは、故郷に帰る途中の森の中での出来事だ。

私が『それ』を見たとき、畏怖（いふ）の念を抱いた。
森の中でただ一ヶ所だけ、天からの加護を受けているかのように光が包み込み、周りには無数の剣が地面に刺さっていた所があった。
その中心にタツヤ・カンバヤシがいた。
その時は『あれはどんな人種でもない。強いて言うなら神族に近いが、それとも違う。言うならば、本物の神。』とさえ思えた。

最初はその光景の中に自分が入ることを躊躇（ためら）ったが、誰かが倒れているのでそうも言ってられなかった。
近づいていくたびに、自分が神域を侵（おか）しているような感覚に囚（とら）われた。それでも、ようやく彼の許にたどり着いたときには、周りはいつもの森へと戻っていた。
様子を確かめようと彼を見ると、すごく綺麗な顔つきをしていた。
私が若い男性とあまり接していないことを鑑（かんが）みても、タツヤの顔立

ちは美しかった。男性には失礼だと考えたが、自然とそんな風に思っていた。
簡単な検査をすると彼は特に悪いところなどなく、ただ眠っているだけだった。それを確認すると彼を馬に乗せて、家へと向かおうとした。
しかし、彼の周りにあった剣をどうするか迷った。最終的にこのまま放置しておくわけにはいかないと思い、無数とも思えた剣を全て拾った。
馬を走らせていると途中で目覚めるかとも思ったが、そんな様子は皆無(かいむ)でぐっすりと眠っていた。

しばらくしたら目が覚めるだろうと思っていた私は、料理を作って彼が目覚めるのを待っていた。
しかし、2日が経過しても彼が目覚める様子がないので焦ってきた。何度も何度も精密な検査を行うが、結果は同じ。
そろそろ首都に戻り神官にでも見せるべきか、と考えていると彼は目覚めた。
彼が敵国のスパイという可能性がなかったわけではない。しかし、その心配もなくなっていた。なぜなら、私の料理を食べて平気だったからである。
料理には食べた相手が術者にとって、敵意を持っていた場合のみ麻痺性の毒が発動するように術を仕込んでおいた。それが反応しないということは、少なくとも現時点で私には敵対する気がないということである。
私はそれなりに知られた名だったし、戦場にも行っていたので敵国のスパイなら間違いなく警戒するだろう。それは慢心でもなんでもなく、ただの事実である。もし、スパイだとしても私の顔を知らないならば、その者は取るに足らないということだ。

彼は記憶喪失だと自分を説明した。

私にはそれが嘘であることはすぐに分かった。これでも城内では政治的な役割もこなしてきたのだ、相手の嘘はある程度見抜ける。しかし、私は特に追及をしようとは思わなかった。違う、思えなかったのだ。
記憶喪失だと言ったときの彼の顔が、あまりにも申し訳なさそうだったから。

私が彼のことを警戒しなくなったのは、そのときからだろう。
私は必要以上に相手との関係をもとうとは思わない。それは自分の弱点になるからだ。
弱点を見せれば即座に喰われる。生き残りたければ弱さを決して見せず、相手を信頼せず、己(おの)が目的のためにだけ動く。
私が過ごしてきた王宮とはそのような場所だった。本当に醜(みにく)い場所だ。
そんな場所で生き抜いてきている私が警戒を解くというのは、自分でも信じれないことである。
そのことで彼に興味が湧(わ)いた。

まさか、家で両親があんなことを言うなんて、思ってもいなかったのだが。
あ、あのことはっ！
さすがに予想外すぎて私も上手く反応できなかったというか。
あ、タツヤさんのことが嫌いというわけではないんですけど。
ただ、その……。もう少しお互いのことをよく知った上で行うべきであって、急にけ、結婚なんて！！
はぁ、私は一体誰に言い訳を言ってるんでしょう…？

ゴホン

夜は彼の部屋を訪れた。何となくそんな気分だったのだ。

もっとも、その時は何となく彼を訪れたいと思う自分に戸惑って、監視のためという名目にしたのだが。
彼は夜空を見て考え事をしていた。その後姿に少しだけ見惚れたのは、ここだけの話だ。
話しかけてみると、彼は苦笑しながら私の問いに答えた。その表情はとても晴れやかで、不覚にも……その、か、か、かっこいいと思ってしまった。
もちろん、これは完全に私の男性に対する耐性なさが原因だろう。しかし、一度そんな風に思ってしまってはどうすることも出来ない。かと言って、私はこの気持ちをどうすればいいのかも分からない。

とにかく、明日は彼と一緒にクエストに行くことになっている。内心はかなりウキウキである。今晩、寝付けるかも分からない。しかし、明日のクエストのためにも早く寝て、体調を万全にする必要があるだろう。
今日はこれでおしまいとする。

「こんなところですかね」

今日の分の日記を見ながら、私は満足して頷きます。
基本的にこの日記には楽しいことしか書かれていません。それは私が辛いときや、苦しいときに見て元気をもらうためです。
……だとすると、これは日記というのは適切ではないかもしれません。
それに書くと言っても頭の中に思い浮かべたとおりに筆記具を動かすので、他の方とはやり方が違うかもしれませんが。
いえ、細かいことを考えるのは止しましょう。今日は素晴らしい日なのですから。

「ふぅ」

思わずため息が漏れます。
それは疲れからくるものではありません。あまりにもおいしい料理を食べたときのため息に近いです。

「タツヤさん」

名前を呼ぶと、頬が赤くなり熱を持つのが分かります。
たぶん、今の私の表情はニヤニヤとしたものになっているでしょう。
こんな顔では決して他の人――特にタツヤさん――の前には出れません。
耐性がないというのは困りものです。

「あ、明日のために早く寝ることにしましょう」

私は言う必要のないことを口にしながら、ベッドの中に入ります。
いつもなら、すぐに眠ることが出来きるのですが。
しかし、目を閉じると、タツヤさんの顔が出てきて私は再び顔を真っ赤に染めることになりました。
早くなった鼓動を感じながら、私は枕に顔を埋めます。

「タツヤさん」

止せばいいのに、私は再び名前を呼びます。さらに加速する鼓動。
ですが、それは不快ではなく、むしろ心地よく感じられます。
そのことに頬を緩ませながら、私は眠りに落ちました。

第2話　異世界の初夜（後書き）

誤字・脱字など御座いましたら、報告お願いしたします。
感想は大歓迎です！

第3話　魔術との遭遇（前書き）

マイペース更新です。
亀ですが、辛抱強く待ってくれたらうれしいです。

※3／1　修正

第3話　魔術との遭遇

「ん？」

俺が違和感に気づいたのは、毎朝の習慣となっている精神統一のときだった。
泊まった部屋で正座をし集中をしていたのだが、いつもとは違う感じがした。まるで体の中に今までになかった何かがあるみたいだ。
だが、それはあるだけで別になんともなかった。というか、逆に力が湧くというか…。

「なんだ、これ？」

疑問を口にするが誰も答えてくれる人はいない。
そう言えば、爺さんが昔に言ってたな、氣とはある日にふと感じられるようになるものだって。
ということはこれは氣なのか？

「これがねぇ」

意識を集中させると、手足のように自由に動かせる……ような気がする。なんだか、完全に制御できてるみたいだ。
とりあえず、外に溢れないようにして体の中で循環させておく。
全身に血液が行き渡るみたいな感覚があり、少しだけ痺れたような感じがする。
ようは、正座して立ち上がってときの感覚だ。それが全身に。不快なことこの上ない。
しかし、その感覚は5分もせずに治まる。

「よし」

それを確認すると俺は部屋を出た。
今日は初めてのクエストなのだ。テンションが上がらないわけがない。
気づけば、まだ陽が昇っていない時間に目覚めていた。
精神統一も終わったので鍛錬を行うことにする。いつもは学校があるので行えないのだが、今は別である。

メリリアさん家は裏庭も広かった。これは昨日の夜に窓から眺めていて気づいたことだ。
勝手に使わせてもらっているが、たぶん問題ないと思う。
それと、これも昨日の夜に気づいたことだが、どうやら俺と一緒に落ちていた刀は真剣だったようだ。最初は爺さんの観賞用の刀だと思い込んでいたのだが、試しに抜刀してみたら見事に真剣だった。
戸惑ったが、ギルドに登録したのだから好都合と割り切った。
この状況の理不尽さに今更嘆(なげ)いてもどうにもならない。

「ふぅ」

一通り型を確認した。
最初はどうかと思ったが間違いないようである。
身体能力が遥かに向上している。これは喜んでいいのか微妙である。
今までの十年以上の鍛錬が一瞬で無に還ったような気がしないでもない。

「タツヤさーん！」

メリリアさんの呼ぶ声がする。なぜだが焦っているような気がした。

何かあったのかと思い、急いでメリリアさんの声がする場所へと向かった。
メリリアさんの許に着くと、メリリアさんはやはり焦った様子で俺を探していた。

「どうしたんですか！？」

「タツヤさん！」

メリリアさんは俺の姿を見つけるなり、いきなり抱きついてきた。
そうなると、当然……な？その、メリリアさんは女性であって俺は健全な男子なのである。
しかも、メリリアさんは美女にして素晴らしいバストをお持ちである。当然、そのバストは俺に直撃するわけでありまして。

「ちょっ！？」

俺はメリリアさんの行動に驚きと、さらには別の感情を抱く。
普段のメリリアさんからは想像できない行動だ。

「一体、何があったんですか？」

出来るだけ優しい声で問いかける。
一瞬だけ見えたメリリアさんの切羽詰(せっぱつま)って、今にも泣き出しそうな表情は只事(ただごと)ではない。もしここで俺まで冷静さを失ったら、状況はさらに悪くなるかもしれない。

「――――――起きたら、タツヤさんがいなくて」

……へ？

これはあまりにも予想外な回答ですよ？

「えっと、メリリアさん？」

俺がメリリアさんの肩に触れようとすると、あることに気づいた。
メリリアさんの肩がすごく震えていたのだ。
その震え方は泣いているというよりも、怯えている…のか？
それを見ると何も言えなくなる。俺は黙ってメリリアさんの頭を撫でた。
しばらくすると落ち着いたみたいだ。

「取り乱してすみません」

微妙に頬を赤らめながらメリリアさんは俺に頭を下げた。
いや、まぁ、俺としては役得だったから問題はない。むしろ嬉し――ごほん。

「いえ、気にしないでください。迷惑じゃなかったんで」

それよりも気になることがある。
それはメリリアさんの怯えようだ。俺がいないから怯えるなんて、さすがにどうかと思う。死ぬわけでもなしに……。
ま、余所者（よそもの）の俺が聞くべきことでもないだろう。

「それでは、私は仕事に行きますので、昼ごろにギルドに来てください」

「分かりました」

メリリアさんは未だに頬を赤らめたまま、仕事へと向かっていった。

俺は手を振ってそれを見送った。
さて、何をしようか？うーん、取りあえず、腹が減っては戦は出来ぬ。
ということで、飯を食べることにする。
クラシスさんは準備してくれるだろうか。今現在、俺の懸念事項の第1位はそれである。

◆◇◆◇◆◇◆◇

この街は朝から元気だった。
いやまぁ、東京なんかの都市部はもっとすごいのかもしれないが、残念ながら俺は片田舎の出身だ。この街の賑わいでも十分にすごいと思う。
市場は商人たちが元気よく商売を行っている。
ときどき商人たちに声を掛けられる。だけど、俺は金を所持していないのであくまで見るだけだ。
しばらくウロウロしていると俺が買う気がないと悟ったのか、商人たちは声を掛けなくなった。その判断力や観察眼の高さは見事の一言に尽きる。

「さて、どうしたものか」

市場もだいたい見終わり、することがなくなってきた。
昼にはまだ時間がある。
今からギルドに行っても昨日のように変な視線を集める気がする。
メリリアさん目立ってたからなぁ。
こんなときは、直感と勘を頼りに進むといい。
言っておくが、迷子とちょっと道が分からないだけは決して違う！

俺はいつもちょっと道が分からなくなるだけだ！

「そうと決まれば」

俺は市場を後にした。
歩いていくと周りはだんだんと貧民街（スラム）のような場所になってくる。
高価そうな緋色のローブを着ているせいか、かなり視線を感じる。
もしかしなくても危ない感じですか？少しだけ歩く速度を上げる。
武術を習っていたので素人にはあまり負けるとは思わないが、危険は少ないほうがいい。

貧民街を抜けると表通りのような場所に出た。俺は勘に従って進んでいく。
すると、一軒の店が目に入った。そこは表通りから路地を進んだところにある店だった。
看板はあるが俺は字を読めないので、何の店なのかは分からない。
外観は貧民街の家と大して変わらない。
興味が湧いてきたので店に行ってみる。

店に入ると内装は悪く言えば古ぼけた、良く言えば年季を感じさせるような店だ。商品らしいものは置いておらず、何とも言えない雰囲気が漂っていた。
何の店なのだろうか？俺は店に入ってから疑問に思うのはおかしいことを思っていた。

「おや、珍しいね。誰かが来るなんて」

店の奥から出てきたのは、独特の衣装に身を包んだ白髪蒼眼の老婆だった。老婆は俺を見ると怪訝（けげん）そうな顔をする。
何かおかしいだろうか？

「どっかの坊ちゃんが来るような店じゃないんだけどね」

どうやら俺のローブを見てどこかの貴族か何かだと思ったようだ。この世界に貴族があるかは分からないが、老婆の発言から察するにそういうことだろう。

「えっと、別に坊ちゃんじゃないんですけど……。ここは何のお店なんですか？」

「おや、違うのかい？というよりも何の店なのかも知らずに来たのかい？」

老婆は俺の発言に呆れながら答える。

まぁ、こればっかりは仕方ないと思う。俺だってどんな店か分からずに入るなんて奇行は稀にしかしない。

「看板は見たんですけど、字が読めなかったんです。それでどんな店か気になって来ました」

「無茶苦茶な理由だねぇ」

老婆はニヤリと笑みを浮かべる。その笑みは悪寒を感じるには十分で、背筋に冷たい汗が流れる。

「この店は占いの店さ」

「占い…ですか？」

そうさ、と言い老婆は店の奥から水晶を持ってきた。

水晶で占いって元の世界と同じなのかよ。

「占いは水晶に魔術を使ってそいつの魔力がどれくらいあるのか、どの属性との相性がいいのかを調べるのさ」

訂正、どうやら元の世界とは占いの定義が違うようだ。

しかし、魔術かぁ。これは非常に興味がある。

というか、元の世界の住人ならば誰しもが興味を惹(ひ)かれる事だろう。

「それって俺でもできますか？」

ここで出来ないなどと言われたら泣く。間違いなく、泣く。

「誰でも出来るさ」

よし！これはすぐにでも――――あー、無理だ。

俺は肩を落とした。

「それって、いつでもいいですか？」

「今からやるかい？」

老婆は先ほどと同じ笑みを浮かべる。

それは非常に魅力的な提案なのだが、俺には選択できない。

「あー、出来ればそうしたいんですけど。今は持ち合わせがなくて」

俺は頭を掻きながら答える。

よく考えなくとも、この世界のお金など一切所持していない。文無しである。

ここはお店であり無料(タダ)ではない。お金を払わなければ商売にならないのは世界の常識である。
これはメリリアさんとのクエストの報酬に期待するしかない。

「ふむ。なら、初回ってことでタダにしてやろう」

「えっ、本当ですか！？」

初回でタダはやり過ぎな気がする。というか、絶対に赤字だろ。
しかし、選択肢のなかに出来るという項目が増えたなら、どうしても選びたくなる。

「……お願いします」

「若いうちは年寄りに頼っておくといいさ」

老婆はまたもや笑みを浮かべた。それを見て、すごく良い人なんだぁと思う。
こんな見ず知らずのやつに温情を掛けてくれるなんて、良い人過ぎる。

「それじゃあ、この水晶に手を乗せてみな」

老婆に言われたとおりに水晶に手を乗せる。
最初は水晶が光ったりするのかとワクワクしていたが、特に変化がない。あれ？失敗？もしかして、才能が……ない？

「ふむ」

老婆は水晶を覗き込んだまま、口に手を当ててなにやら考え込んで

いる。正直、なにがどうなっているのか。
俺が不安と戦っていると、老婆は突然、立ち上がり店の奥へと行った。まさかの放置！？
俺が更なる不安を抱いていると、さらに大きな水晶を持ってきた。
最初の水晶が元の世界の道端で見かける占い師と同じくらいの大きさだとしたら、持ってきたのはサッカーボールより一回り大きい水晶だ。

「今度はこちらに手を乗せてくれ」

老婆は真剣な表情で言った。なにこれ、怖い。
先ほどまではニヤリと不敵な笑みを浮かべていた人物が、急に真剣になるのだ。恐怖を感じられずにはいられまい。
俺は無言で大きな水晶に手を乗せた。
しかし、先ほどと同じように水晶に変化は無い。

「ふむ」

「えっと、何か問題でもありましたか？水晶になんの変化もないみたいですし…」

俺は思い切って聞いてみた。だって、無言ほど怖いものはないよ？

「お前さんから見て変化がないのは当たり前だよ。客でも水晶が使えるなら、商売にならないだろう？」

確かに、それはそうである。自分で使えるなら金を払わずに自分でやればいい。

「じゃあ、どうして何も言わないんですか？」

「……正直、水晶の故障だと思うほうが納得できる結果が出てからさ」

あれ、何だが嫌な予感。こう、本能的に嫌な感じがする。

「お前さんの魔力だが、どうやら5千万以上らしい」

5千万って、さすがに曖昧過ぎないだろうか？
というか、それは凄そうだけど平均が分からない。

「それは、どのくらいなんですか？」

「普通のやつがだいたい１００、魔術師が１０００、一流魔術師が５０００。そして、フェルテイナ王国の最終兵器“フェルテイナ魔導師団”の規格外の隊長が５０万。魔術に例えると、初級魔法が１０、中級魔法が１００、上級魔法が１０００、古代呪文（エンシェント・スペル）が１０万って言うと分かるかい？」

あー、大まかな計算で行くと俺は一流魔術師が1万人集まったくらいの魔力ってことですね。っておいっ！！！
多すぎだろっ！！偏りすぎだろっ！バランス考えろっ！

「お前さん、魔術は初心者だろ？なら、得意属性も分かってないね？」

老婆は俺の返事も待たずに店の奥へと入っていった。これ以上は耐えれる自信が無い。正直言うと、自分の魔力に驚いている。
魔力なんて感じなかっ――もしかして、朝の氣か？あれが魔力か？
あれなのか？

考えていると、いつのまにか老婆が戻ってきていた。手には先ほどと同じようなサッカーボール大の水晶を持って。

「それじゃあ、今度はこいつに手を乗せてごらん」

俺はゆっくりと手を乗せる。正直、戦々恐々としている。

「ふむ、お前さんの得意属性は“無”だね」

「得意属性が無い？」

それはどういうことなのだろうか。可能性としては全部使えないか、もしくは全部平等に使えるといったところだろう。

「いや、得意属性はある。まずは魔術の属性から説明しよう」

老婆の話を要約すると以下の通りだ。

魔術には基本属性として火、水、雷、土、風が存在する。稀に基本属性以外の素質を持つものもいる。その者は光か闇の属性である。得意属性とは術者がもつ本質のようなもので、それによって自身が使える魔術の種類や威力が変化する。得意属性の魔術を行使すると、威力は高くなる。逆に得意属性でない魔術は威力が低い。相性が悪ければ、最悪、行使すらまともに行えない。

「俺の“無”って言うのは？」

「中には属性に分類できない魔術も存在するのさ。例えば身体強化や治癒魔術なんかだね。そういった魔術のことを、まとめて無属性魔術に分類してるのさ。つまり、お前さんは身体強化や治癒魔術が得意ってことだよ」

よかった。魔力より厄介ではなさそうだ。正直、魔力が異常な時はどうし――――

「にしても、無属性が得意属性なんて聞いたことがないね」

聞こえなーーい！俺には聞こえない！俺は普通の人間だ！一般人だ！俺が必死の現実逃避をしていると、老婆は俺の肩に手を置いて一言。

「ば・け・も・の♪」

「……」

俺は無言で項垂(うなだ)れた。まさか、この世界に来てまでその言葉を言われるとは。

元の世界でも確かに俺は化け物と言われたが、こっちでも変わらないらしい。

しかしまぁ、慣れてると言えば慣れてるので早急に立ち直る。

「ま、何とかなるだろう」

「お、立ち直りが早いね。そんなお前さんに助言をしておこう。お前さんの魔力は強力だ。目立ちたくないなら、あまり使わないことだよ」

その言葉に俺は驚いた。どうして俺が目立ちたくないと知っているのだろうか。

「そんなに深々とローブを被ってるやつが目立ちたいなんて思うわけ無いさ。普通に考えればその逆の目立ちたくないと思ってるなん

て分かるさ」

あー、若干、慣れつつあるローブの存在を完全に忘れていた。そういえば顔、隠しているんだったな。
俺はそれを思い出すとローブを取って、老婆に向き合う。

「失礼しました。俺はタツヤ・カンバヤシです。ギルドで冒険者やってます」

「おやおや、これはご丁寧に。ワシはディエスタ。しがない占い師さ」

「では、ディエスタさん。魔術の使い方について教えてもらってもいいですか？」

魔術を使える人が近くに――――いたな。メリリアさん。
でも、彼女にこれ以上は負担を掛けたくないので、心苦しいがディエスタさんに頼むことにする。

「ふむ、長くなるから今日は本でも読んでるといいさ」

そう言って、ディエスタさんは奥へと行き何冊もの本を持ってきた。
重くはないのだろうか？

「明日には準備をしておくから、今日はこれを読んでおきな」

本の表紙には
『超簡単魔術書～初心者の君もすぐに使えるようになる！？～』
『初めての魔術　初級編』
『初心者でも大丈夫！魔術簡単習得！』

『失敗しない魔術の学び方』
他にもあるが、どれも不安になるタイトルである。これで大丈夫なのか？

「ありがとうございました。何から何まで」

「気にしなくていいさ。若者は頼る権利があるからね」

最後まで優しい老婆に俺は苦笑を漏らす。

「それでは貴方たちもお元気で」

俺は静かに店を出た。
道を聞けばよかったと思ったのは、だいぶ後になってからである。

◆◇◆◇◆◇◆◇

〜〜　ディエスタ　〜〜

「師匠、行きましたか？」

店の奥からワシの弟子が声を掛ける。名前は、そう、カトラスだったかな？うむ、どうやら物忘れが多くなってきているようだね。
ワシは手元の水晶を弄(いじ)くりながら、先ほどの少年――タツヤ・カンバヤシについて考えている。

「カトラス、お前さんは下手に気配を悟られるようなまねはしてお

らんよな？」

これはあくまで確認。ワシもカトラスの気配はほぼ完璧というくらいに消えていたと思うさ。

なぜ、気配を隠してたのかと言うと、大抵の者は他の種族のことをあまり良くは思わない。ここ、フェルテイナ王国は随分とマシではあるが、全く無いというわけではないのだ。

そこで、一応カトラスには気配を消してもらってたのさ。カトラスは森人なので、気配を消すことに関しては天下一品である。

「いや、カトラスじゃなくてイオルガですけど…。まぁ、そんなことはしてないと思いますけど、何か失敗しましたか？」

む、イオルガだったか。それはいいのだが、そうなると最後のタツヤの言葉は腑に落ちないさ。

「イオルガ、お前さんは1人相手に『貴方たち』なんて使うかね？」

「いいえ、まさか。でも、それがどうかしたんですか？」

ワシは――ふむ、シフリナの返事を聞いてさらに考え込む。最近の若いものの新しい呼び方かと思ったが、違うらしい。

となると、必然的に導き出される結論は一つ。

「シフリナよ、先ほどのやつは大物になるやもしれん」

「違います、イオルガです。というか、興味のあるやつ以外の名前を覚えない癖は、いい加減に直してください。僕が泣きそうです」

タツヤの将来が楽しみじゃな。ワシは知らず知らずのうちに笑い出

してしまう。

「はぁ、それより王宮から出張の依頼が来てますよ」

王宮からの依頼とあっては無下に出来ないね。ワシはすぐに準備を始める。

その間にもタツヤのことを思い出して、笑みがこぼれてしまう。これほど楽しいことなど、何十年ぶりだろうか。

「さて、王宮に向かうとするさ」

第3話　魔術との遭遇（後書き）

誤字・脱字などの報告は大歓迎です。
感想もしてくれると嬉しいです。

第４話　奴隷とクエスト（前書き）

※４／１８　修正

第４話　奴隷とクエスト

「兄ちゃん。ちょっといいかい」

俺はディエスタさんの店を後にして再び貧民街を歩いてた。魔術を教えてもらえるとなったのでテンションは高い。

と言ってもこの男に声を掛けられるまでは、だが。

「どうかしました？」

「なに、商売をしたいんだ」

俺は男の言葉に違和感を覚える。商売はこんなところでするものなのか？それに商品らしきものは見当たらない。

強いて言えば――――

「そうだ、これだよ」

後ろにある布の中からする人の気配くらい。

男は自分の後ろのある布を一気に取った。布の中には檻の中に入った少女がいた。

少女は銀髪に銀色の瞳をし、髪は肩で切られていた。そこまでなら、なんら問題はなかった。いや、少女が檻の中にいる時点で問題かもしれないが。

しかし、少女には首輪がつけられており、服はボロボロ、痩せこけて、瞳には光がなかった。その瞬間に俺は悟る。

――――奴隷

貴族があるのと同じようにこの世界には奴隷もあるようだ。そんなことを冷静に受け止める自分がいた。
こんな時、正義感の強い人なら助けたりするのだろうか？しかし、残念ながら俺は正義感の強い人ではないのだ。
奴隷はこの世界で珍しいのかは分からない。いや、この男が見ず知らずの人間に声を掛けたことを考えると、珍しいものではないかもしれない。
いずれにしても、この問題（ドレイのこと）はこの世界が解決する問題である。俺が口出しをしてもろくな結果にはならない。
答えを教えるのは簡単だが、自分で考え行動しない限りは駄目になっていくのが目に見えている。なので、俺はこの問題（ドレイのこと）に口出しをするつもりはない。

「こいつはね。まだ幼いころに俺が買い取って、今まで手塩にかけて育ててきたんだよ。なんでも森人と人間のハーフらしい。もちろん、まだ未使用だから夜のほうも楽しめるぜ。今なら銀貨６枚のところを、特別に銀貨４枚だ！」

俺は自分の関係のないことならば、相手がどうなっていようと手を出さない。それが平和に生きるために必要なことだ。関係ないことならば、ね。
しゃがんで、檻の中にいる少女の目を覗き込む。完全に光が無い。
昔、誰かが言ったことを思い出す。
『希望が無ければ、絶望しない』
だが、それは違う。希望が無い時点ですでに『絶望』しているのだ。
そして、最初から絶望している人は、絶望の悲しみさえ知らない。
だから、俺は自己満足のためにこの少女に希望を与えようと思う。
悲しみを教えるために希望を与える、何てバカらしい響（ひび）きなんだろう。

そうと決まれば、この奴隷を買った場合の問題点とその対策を考えるとしよう。
初めに、こっちの世界での奴隷の扱いが分からない。推測できることは、見知らぬ客に売れるということから、良ければ国が黙認レベル。最悪、容認している可能性すらある。そうなると、買うこと自体には大した問題はないはず。
次に風評的な問題だ。奴隷は貴族または商人が買っている可能性が高い。一個人として買ったということが分かると、変な注目を受けることもありえる。まだ俺の事情を知っている人もいないので、目立ちたくはない……が、俺はこちらの世界に来たばかりで近所付き合いがない上に知り合いがいないため、奴隷だとばれることはないはずだ。
まぁ、最悪、近くの森でも教えてもらってそこで暮らせばいいか。
だとしたら、食べれる食材を聞いておいたほうがいいな。
立ち上がり、男を見る。

「分かりました、買いましょう。ただし、明日の夕刻まで待ってください。もちろん、金は提示した金額の倍――銀貨１２枚払います」

「そうか。ま、金を払ってくれるなら問題は無い」

「では、明日の夕刻にここで会いましょう」

俺はそう言うと、もう一度だけ少女を見る。少女は会話を気にした様子も無く、ただそこにあった。
その様子に決意をする。俺の決意とは誓いであり、契約である。決して途中で投げ出さず、どんな結果になろうともそれを受け止める。
それを俺は決意し、神に誓い、世界と契約する。だから、どうというわけでもないのだが、やる気の問題である。
さて、まずは本をメリリアさん家に置かせてもらわなければ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

人の視線が煩わしいと思ったのはいつ以来だろう。
ギルドの1階はギルドの登録者――通称“冒険者”――以外でも、飲食が可能である。俺はそこで椅子に座ってメリリアさんを待っているのだが、異常に注目を集めている。まぁ、昨日の反応からして予想はしてたけどね。
どうしたものかと考えていると、一斉に視線が外れ静かになった。
周りの視線を追うと、ギルドの入り口に向けられていた。

「えっと」

入り口にはメリリアさんが立っていた。

――白銀の豪華なマントを羽織った状態で。

……すごく目立ってる。仕事着なのかもしれないが、正直言って止めてほしい。これ以上は目立ちたくない。お願いだから！
俺は自然とローブを深く被りなおした。

「あ、タツヤさん」

その行動が見つかる要因となったらしい。いや、見つからないとクエストには行けないけどさ。
メリリアさんは俺を見つけると、真っ直ぐに俺の許にやってきた。
その様はさながらモーゼの如く、冒険者たちが道を開けていく。

「では、クエストに参(まい)りましょう」

メリリアさんは近くで立ち止まり、笑顔で言ってきた。惚れ惚れとする素晴らしい笑顔ですね。

俺はさっきよりも強い視線を受けながらも立ち上がる。

……早くクエストに行きたい。

「どのクエストにしますか？私はどのクエストでも問題ありませんよ」

目の前にある木板(ボード)を見る。そこにはたくさんの紙が張られていた。

それは一つ一つがクエストなのだろう。

「俺は字が読めないんで、条件を指定させてもらいます。それにあったクエストを探してもらっていいですか？」

「あ、そうでしたね。すみません、気が回りませんでした。それではどんなクエストを？」

「報酬が銀貨２４枚以上で、明日の夕方までに終えれるようなクエストはないですか？」

この世界の貨幣価値は知らない。しかし、奴隷商売を裏路地でやっていたことを考えれば、そこまで高価ではないと思う。

「銀貨２４枚を明日までですか。そんなにお金がいるようなことがあったんですか？」

本当は銀貨１２枚でいいんだが、報酬を二分割することを考えると単純に倍必要だろう。

メリリアさんの口調を考えると中々の金額らしい。用意できるだろうか？
まぁ、どんな手段を使っても用意するつもりだけど。

「ええ、少しだけ問題がありまして」

苦笑をしながら答える。出来ればあまり詮索（せんさく）はされたくないのだが。

「そうですか。銀貨２４枚以上で明日までとなると、今あるのでは一ＡＡのクエストになります。よろしいですか？」

メリリアさんは俺にこれ以上質問をすることなく、木板（ボード）からクエストを選んでくれた。この、相手を気づかう優しさ！メリリアさんはいい奥さんになるだろう。
しかし、一ＡＡってのはやばいのでないだろうか。正直、初クエストだからなんとも言えなが、初心者が選んでいいクエストではないと思う。
と言っても、他に金を稼ぐ手段もないため、これをするしかない。

「はい、お願いします」

「分かりました」

メリリアさんは俺の眼を見て、一瞬だけ微笑むと受付に紙を持っていった。
俺もその後を追って受付に行く。

「二名でのご登録ですね？では、お二人のギルドカードの提示をお願いします」

受付嬢は昨日の人とは、また違う人だった。しかも、メリリアさんに一切臆(おく)する様子が無い。その時点でもおかしいのだが、他にも何だが違和感を覚える。
違和感の正体も分からなかったので、言われたとおりにギルドカードを渡す。

「メリリア・リス・コーティスさんとタツヤ・カンバヤシさんですね。クエストの登録が完了しました。ご健闘をお祈りします」

受付嬢は笑顔で俺とメリリアさんを送り出した。

◆◇◆◇◆◇◆◇

俺達は馬に乗って走行していた。景色がすごい速度で後ろに消えていく。
道は舗装(ほそう)されているわけもなく、揺れるのなんのって、もうすごい。
この揺れ具合だと、気を抜けば酔える自信がある。

「あ、聞き忘れてたんですけど、どんなクエストなんですか？」

「クエスト内容は中級竜種(ドラゴン)1頭の討伐です。竜種(ドラゴン)の種類は《火炎竜(フレイムドラゴン)》。火を司(つかさど)るドラゴンです」

Oh、いきなりドラゴンですか。ハードルが高い！
俺が原因なのは分かってるんだけど、文句の一つでも言いたくなる。
ドラゴンと言ったらゲームでも上位に位置するモンスターである。
しかも、中級って。……この場合は上級じゃないだけマシと考えるほうが、プラス思考でいいかもしれない。

そんなことを考えてくると、周りの風景が次第に変わってきた。
さっきまでは森の中を走っていたのに、今は枯れ木や枯れ草、岩が多くなってきている。さらに言うなら、前方には活火山がある。
火炎（フレイム）というだけに火山ですか……。

しばらく進むと馬の速度が落ちてきた。何か問題でもあったのだろうかと思ったが、メリリアさんは特に慌（あわ）てたり焦（あせ）ったりしている様子はなかた。

「ここからは歩いて進みます」

メリリアさんはそういうと馬から降りる。俺もそれに倣（なら）い馬から降りた。
周りは岩が乱立しており、その光景は某狩猟ゲームのステージを彷（ほう）彿（ふつ）とさせる。まさか、そんな場所でリアルハンティングをすることになるとは、露（つゆ）ほどにも思わなかったが。
メリリアさんは馬を岩の陰に連れて行くと、右手を前に出した。何をするのだろうか？

「〈風の檻（ウィンケージ）〉」

メリリアさんの右手にある宝石が輝いたと思うと、馬の周りにはドーム状の何かが展開してあった。
まさか、これが魔術とやらかっ！？俺はとても興奮している。だって、魔法れすよ！？魔法！！人間が夢に描き、決してたどり着けなかった魔法！！
これを見てテンションがあがらずにいられるだろうか。いや、いられまい。

「行きましょう」

メリリアさんは事なげに言う。うおぉ、かっけぇ。クールな出来る女性、憧れるね。
感動していると、変な気配を感じた。気配は火山の方から６コくらいだろうか。こちらに近づいてくる。
俺は腰の鞘から抜刀した。その行動にメリリアさんは最初、首を傾げたのだが、すぐに火山の方に向き直る。メリリアさんも気配に気づいたのだろう。

その姿を見て始めに思ったことは、『キモい』この一言に尽きる。
いやだって、全身が赤く人型をして眼が４つで棍棒を持ったデッカイやつが、６体も迫ってきてるんだぜ？速度はそこまでないにしても、キモいって思うだろ。
まぁ、最初の実戦が人型なのはありがたかった。人以外との戦闘経験がないわけではないが、人型のほうがやり易いのは言うまでもない。
６体は俺とメリリアさんの前から、ゆっくりと近づいてきた。

「こんな時に《バーバス》だなんて」

「ばーばす？」

メリリアさんがポツリと洩らす。俺は初めて聞く単語に聞き返した。

「《バーバス》は人型の魔獣で知能は高くないんですけど、腕力が強く肌が硬いために厄介な魔獣なんです」

なるほど。肌が硬いってのは厄介だな。だとしても、魔術で火を使うなり、雷を使うなりすればいいのではないだろうか。

「いえ、倒すのは問題ないのですが。今回はタツヤさんの訓練も兼ねてましたので、タツヤさんに戦ってもらおうと思っていたんです。でも、《バーバス》は難易度が高すぎますね」

「あ、それなら、俺がやりますよ」

それだけを伝えると地面を蹴って《バーバス》の前に飛び出す。瞬間のことだったので、メリリアさんは反応出来なかったみたいだ。近くで見るとさらに気持ちが悪い。大きさはざっと３ｍくらい。筋肉が隆々（りゅうりゅう）としているので、とにかく気持ち悪い。そのことを頭の隅（すみ）に追いやり、俺は意識を戦闘に切り替える。

第４話　奴隷とクエスト（後書き）

誤字・脱字などの報告は大歓迎です。
感想を書いてくれると嬉しいです。

第5話　ＶＳ　火炎龍（前書き）

戦闘シーンが上手く書けていないかもです。
作者の現在の全力はこれです。
しかし、作者はあと変化を2段階残している可能性があったりなかったりします。

今後の成長にご期待ください。

※３／８　修正

第5話　VS　火炎龍

ザシュッ

肉を切り裂く音が一瞬だけする。次の瞬間には辺りに赤い雨が降った。

しかし、それはすぐに止み龍哉の正面にいた《バーバス》が地面に倒れる。

仲間の《バーバス》達は完全に反応できていなかった。《バーバス》が倒れたのを見ても、首を傾げるだけ。状況を上手く認識できていないようだ。

「やっぱり、肌が硬くても目は貫けるな。後頭部まで貫通してたけど、もしかして肌も切れるのか？」

龍哉はその場にそぐわない、まるで天気の話をしているかのような声で言う。表情は真剣だし、体勢も素早く動けるようになってはいた。それでも声だけが合わない。

《バーバス》達は、仲間が死んだことに対し考えるのを止めた。それよりも目の前の獲物（タツヤ）の方が重要なのだ。

2体の《バーバス》は同時に、棍棒を振りかざして龍哉に迫ってくる。龍哉は慌てた様子などは微塵（みじん）も見せてはいなかった。

《バーバス》が腕を全力で振り下ろそうとする。が、しかし、その腕が振り下ろされることはない。

何度も腕を振り、龍哉に攻撃を加えようとする。その時に《バーバス》は初めて違和感に気づいた。彼らの棍棒――――いや、腕がないのだ。

それに気づくと傷口からは大量の血が噴出（ふきだ）した。《バーバス》2体

はそれに構うことなく残った腕で攻撃を仕掛ける。
次の瞬間、2体の《バーバス》の頭と胴は完全に分裂していた。
残った3体の《バーバス》はその時点で龍哉を危険なものとして認識する。《バーバス》は人型をしているために、本能が他の魔獣と比べて比較的に抑えられている。当然、生存本能もである。
もし、ここに他の人型でない魔獣がいたとしたら、戦闘など欠片ほども考えずに逃走するだろう。今の龍哉を見れば、敵が死ぬことなど眼に見えているのだから。

「グォォォァァァァァァァァァ！！」

《バーバス》が咆哮をあげて龍哉に棍棒を構える。様子見のつもりなのか、《バーバス》から龍哉に近づくことは無い。そう、《バーバス》から近づくことはない。
《バーバス》はジッと龍哉を見ているが、気づいたら龍哉はそこにはいなかった。《バーバス》は警戒をする。
その時、ドスンッと何かが倒れる音がして《バーバス》がそちらに目をやる。そこには1体の《バーバス》が赤い液体を流しながら倒れていた。
危険を感じた《バーバス》はとにかく龍哉を視界に捉えようとするが、またもや背後でドスンッと音がする。
《バーバス》は振り返えり、何があったのか確認をしようとする。
しかし、目の前に影が迫ってきたかと思うと、次の瞬間に《バーバス》の意識は闇に消えた。

◆◇◆◇◆◇◆◇

最後の《バーバス》が倒れる。肌が硬いらしいが、実際のところそこまでなかった。と言っても、下手すれば鉄よりも硬いのは分かった。
おそらく、俺の身体能力が向上しているせいで、簡単に切れるようになっているのだろう。訓練の賜物(たまもの)じゃないから、あまりうれしくない。

「ふぅ」

刀を鞘に入れる。同時に戦闘から意識を切り替えた。

「これでいいんですか？」

振り返り、メリリアさんに問う。しかし、メリリアさんは驚愕(きょうがく)した表情で固まっており、俺の声は届いていないようだ。
もしかして、何か不味(まず)いことをしたのだろうか？

「メリリアさん？俺、何かミスをしましたか？」

「あ、いいえ。少しタツヤさんの実力を測り間違えていたので、先ほどの戦闘を見て驚いてしまいました」

む、戦闘前に実力を測られていたとは。もっと意識して、実力が分からないようにしないと。
戦闘前に実力が悟られるなんて、爺さんに聞かれたら殴られる。いや、山篭(やまごも)りと称して熊と一対(サシ)一の勝負をされられるかも。
……だとすると、爺さんに殴られるより、熊と戦うほうが楽でいいな。

「それじゃ、先に進みましょう」

俺はメリリアさんに笑顔で応え、《バーバス》が来た道のほうへと進む。いやね、クールなメリリアさんを見たら、俺もクールになってみたいと思ったんだよ。

「タツヤさん……そちらでなく、こちらの道です」

慣れないことはすべきではない。この言葉が胸に沁(し)みた瞬間だった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

煮えたぎる溶岩が俺の横を流れていく。その光景は、地獄とも言うべきような凄まじいものだった。

ここは火山の麓(ふもと)にある洞窟。火山の溶岩は粘り気が強いらしく、ゆったりと流れていた。

「ふぅ、暑いですね」

俺は額の汗を拭(ぬぐ)う。ローブを着ているせいもあり、ものすごく暑い。いやまぁ、溶岩の近くにいたら、暑いのは分かるけどさ。あー、暑い。この際だから言っておきますけど、俺は寒いのより暑いほうがダメです。

「そうですか？」

こんな環境下だと言うのに、メリリアさんは汗を全くかいておらず、とても涼しい顔をしていた。くそっ、羨ましい！

先ほどの失敗もあったので、今はメリリアさんが先導している。ち

なみにこの洞窟に入って、既に２０分は歩きっぱなしである。

「あの、目的地はまだですか？」

歩くこと自体は全くと言っていいほどに、問題無いのだが、この暑さは無理だ。このままじゃ、俺はスルメになる。もしくは、夏場の蛇。

夏場の蛇と言うのは、俺の家が田舎であるが故のものである。夏場には、干からびて死んでいる蛇がよく道路にあった。他にはカエルとかも。

「もうすぐですよ」

これはさっきの魔獣と出遭ったときにも聞きました。

洞窟に入る前に出遭った《バーバス》の他に、洞窟に入ってからは別の魔獣に出くわした。例えば《ランバール》《フリズリナ》《バエスティロ》などなど。

魔獣については１回、メリリアさんにまとめて教えてもらう必要がありそうだ。

「具体的には」

「すぐです」

……いやね、教えてくれてもいいじゃないですか。別に悪いことを聞いてるわけでもないんですし。

にしても、ここの洞窟は広いな。面積で言えば、もしかしたら東京都くらいはあるんじゃないか？いや、さすがにそれはないか。

そんだけ広かったら、一人ではこれないな。何しろ俺は、迷子――

もとい、ちょっとだけ方向が分からなくなるからな。……ん？迷子？

いや、まさかね。メリリアさんに限ってそんな馬鹿な。ありえないよね。ないですよね？ないといいなぁ…。

「メリリアさん、もしかしてまい「違いますっ！！」…さいですか」

さて、どうやら困ったことになったようだ。俺は生きて帰れるのだろうか。まさか、戦闘以外での死ぬ可能性があったとは、異世界とは恐ろしいものだ。

などと、くだらないことを考えていると、メリリアさんが立ち止まった。あれ？本格的に危ない状態に？

「風の精霊達よ、我に力を貸したまえ。〈地形解析（サーチ）〉」

メリリアさんが呪文を唱えると、メリリアさんの体のから光の輪のようなものが周囲に広がっていく。サーチという名前からして、調査系の魔術なのだろう。

やっぱり、迷子だったんですね。メリリアさんも俺と同じタイプの人なのか。

「タツヤさん、こちらです」

メリリアさんは、生暖かい俺の視線を完全に無視して歩みを進める。いやまぁ、俺が他のやつにそんな視線を送られたら、ついつい手が出るかもしれませんけど。

って、メリリアさんの歩く速度が速い！俺の視線に対する仕返しですか！？

「急にペースを上げないでくださいよっ！」

俺は文句を言いながらも、しっかりとメリリアさんの速度について

いく。もしかしたら、時速４０ｋｍくらいはあるんじゃないか？
こんな足場の悪い中で、そんな速度をよく出せるなぁ。まぁ、ついていけないことはないんだけど。

しばらく、進むと急にメリリアさんが足を止め、岩陰に身を寄せる。
さっきから、気配を感じてはいたが、こんだけ近ければ確信が持てる。

「「（コクン）」」

俺とメリリアさんは無言で頷きあう。未だに姿は確認してないが、
間違いなくこの先の空間に《火炎龍（フレイムドラゴン）》がいる。
俺は抜刀をする。気配だけで距離を測るのは、少しばかり難しいが
やれないことはない。距離はおおよそ１００ｍ。
そして、岩陰から飛び出し、一気に地面を蹴った。

◆◇◆◇◆◇◆◇

龍哉は“それ”を見た瞬間に、一瞬だけ全身の筋肉が硬直した。先
ほどまでも、魔獣と戦ってはいた。しかし、それでも目の前のもの
に驚愕し、動きが止まってしまったのだ。
全長４０ｍ以上。地球で比較するならば、最大の哺乳類シロナガス
クジラ以上の大きさ。四本足で地面に立ち、背中には本体よりも大
きい翼。全身が炎のように赤く、瞳は本当に炎が揺らめいているよ
うな雰囲気すらあった。
その圧倒的な大きさに龍哉は一瞬、ほんの一瞬だけ動きが止まる。
そして、龍哉の目の前にいる《火炎龍（フレイムドラゴン）》はそれを見逃すような、あ
まい存在ではなかった。

《火炎龍(フレイムドラゴン)》は、龍哉とメリリアが接近してきた時点で、その存在に気づいていた。それでも特に反応を示さなかった理由。それは単純に取るに足らない存在だから。
そう、《火炎龍(フレイムドラゴン)》にとっては、人間1人に天族1人など話にならない。少なくとも、一軍が出るべき相手である。
そんなものをギルドの依頼に出すには、ちゃんとした理由がある。単純に上位の冒険者なら、《火炎龍(フレイムドラゴン)》に勝てるから。
《火炎龍(フレイムドラゴン)》は、龍哉の一瞬の隙を見逃しなかった。その隙に炎を口から噴射する。その威力は中級魔術に引けをとらず、下手をすれば上級魔術の威力があった。

「〈氷の盾(アイスシールド)〉っ！！」

メリリアが龍哉の動きを見て、咄嗟に反応する。その反応が無ければ、龍哉はとてつもなく、暑い思いをしたかもしれない。
メリリアの呪文の直後に、龍哉の目の前には大きな氷が出現していた。形状は盾と言うべきものだろう。

「ちっ」

龍哉は先ほどの自分の動きに舌打ちをして、《火炎龍(フレイムドラゴン)》の射程圏外(しゃていけんがい)に逃れる。
それを見た《火炎流(フレイムドラゴン)》は、炎の噴射を止めて右の前足を上げる。その行動に龍哉は頭に疑問符を浮かべる。
龍哉が疑問に思う中、《火炎龍(フレイムドラゴン)》はその足を地面に叩きつけた。直後に周りにあった溶岩が爆発し、辺りに降り注ぐ。

「なっ」

龍哉は驚きながらも、溶岩の雨を回避する。全て紙一重ではあるが、ローブに少しの焦げ目をつけることなく回避していく。
メリリアは龍哉よりもかなり後方に位置していたために、溶岩が襲ってくることは無かった。
そして、雨が止んだのと同時に《火炎龍（フレイムドラゴン）》に高速で急接近する。その速度のためか、辺りには衝撃波が発生した。
龍哉は《火炎龍（フレイムドラゴン）》の右脇のところで、急停止をする。《火炎龍（フレイムドラゴン）》はすぐさま、この動きに反応し右の前足でなぎ払う。
その足をしゃがんで回避すると、《火炎龍（フレイムドラゴン）》の腹の下に転がり込み、そのまま《火炎龍（フレイムドラゴン）》腹に刀を突き立てる。

「ガァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

咆哮と呼ぶには、あまりにも大きすぎる音の塊が龍哉に迫る。龍哉はすぐに刀を抜き、距離を取る。
メリリアも自分の前に魔術を展開し、音を無効化する。それほどまでに大きな咆哮であった。

龍哉が距離を取り、《火炎龍（フレイムドラゴン）》を改めて見ると、その瞳には先ほどまでは無かった明確な殺意があった。《火炎龍（フレイムドラゴン）》は龍哉とメリリアを害虫から敵へと認識を改めたのだ。
《火炎龍（フレイムドラゴン）》から、殺気が溢れ出す。その殺気を感じ取ったこの地域に住む魔獣や動物達は一斉に避難を始める。
しかし、龍哉は涼しげな表情をその殺気を受けていた。メリリアでも冷や汗をかくような殺気の中、龍哉は毅然として《火炎龍（フレイムドラゴン）》と対峙していた。

「神林流師範代、神林　龍哉。出陣（で）る」

言うなり、またもや龍哉は《火炎龍》に急接近をする。もちろん、《火炎龍》がそれを許すわけも無く、先ほどよりも高温の炎が龍哉に迫る。
今回はメリリアの呪文も間に合わずに、龍哉は炎に突っ込むことになる。龍哉はメリリアの目の前で《火炎龍》の炎に包み込まれる。が、炎に負けるような龍哉ではなかった。龍哉は炎の中をものすごい速度で駆け抜け、ものの数秒で《火炎龍》の口元に到達する。

「口を、閉じろっ！」

龍哉が《火炎龍》の口に踵落としを炸裂させる。それにより、強制的に《火炎龍》は口を閉じることとなった。
踵落としの後に龍哉は刀を《火炎龍》の瞳に突き刺し、そのまま両方の瞳を斬った。斬られた痛みより、《火炎龍》はその場で暴れ始める。

「タツヤさん、下がってください」

メリリアの言葉が聞こえると、即座にその言葉に従う。龍哉は《火炎龍》から一気に距離を取った。

「絶望の氷よ、その寒さを以って全てのものを凍えさせよ。終焉の氷よ、その冷たさを以って全てのものを凍らせよ。〈氷の世界〉」

メリリアが呪文を唱えると、《火炎龍》の真下に藍色の魔方陣が出現する。魔方陣はどんどん広がっていき、《火炎龍》を完全に魔方陣内に収める。
すると、急に辺りの温度が下がる。そのことに龍哉が気づくのと同時に、《火炎龍》は氷柱となっていた。

パキンッ

という音がして、中にいた《火炎龍(フレイムドラゴン)》ともどもに砕け散った。

第5話　ＶＳ　火炎龍（後書き）

誤字・脱字などのご報告をお待ちしております。
感想や批評なども大歓迎です。
設定にあまい部分があるかもしれないので、その都度指摘していただけると幸いです。

第6話　勧誘

「お疲れ様です」

俺はメリリアさんの許に駆け寄ると、とりあえず苦労を労(ねぎら)うことに。今回はメリリアさんが大活躍だったので、感謝の意味も含めている。

「タツヤさんもお疲れ様です。あの魔術は魔力を籠(こ)めるのに時間が掛かりますので、タツヤさんが戦闘してくれたのが助かりました」

「いえいえ、これくらいお安い御用ですよ」

これはおそらくだが、メリリアさん1人でも《火炎龍(フレイムドラゴン)》は倒せたのだろう。

理由としては、最初に出遭った《バーバス》の時にメリリアさんは俺には厳しいと言った。まぁ、余裕で勝利したけど。

普通、《バーバス》にも勝てるか分からない俺を、それよりも数十倍以上強い《火炎龍(フレイムドラゴン)》には連れて行かない。逆に言えば確実に勝てるなら連れて行ってもおかしくはないのだ。

「それじゃ、戻りましょうか」

まぁ、細かいことはどうでもいいが、今はこの場から離れたい。理由は簡単だ。

暑い！！そして、暑い！！

大事なことなので2回言いました。ええ、とても大事なことです。それはもう、戦争で相手がどんな目的でどんな作戦をするという情報くらいに大事なことです。

そもそも、人と言うのは過酷な状況下で生きていけるほどに強い生き物ではないのです。他の動物達のように毛があるわけでも、牙や鋭い爪があるわけでもない。武器もなしに過酷な状況下に置かれたら、大抵の人間はどうすることもできません。何もすることもなく、その生涯に幕を下ろすでしょう。それ故に人間は頭脳を武器にしてきたのです。脅威をなくすために武器を開発し、暑さから逃れるためにクーラーや扇風機を開発し、生き残るために医術を考えたのです。そう、人間の武器はアイデンティティは頭脳であり、その肉体そのものではないのです。ですから、人間が暑さから逃れようとするのは仕方の無いことであり、ましてや根性や気力などと言った精神論でどうこうできるものでもないのです。人とは脆(もろ)い生き物なのです。素手では、熊も倒せないような軟弱な生き物なのです。そんな生き物がどうして暑さに耐え切れるというのでしょうか。いいえ、決して耐えることなど出来はしないのです。人はよく環境に適応する能力があると言われますが、それは間違って伝わっています。適応するのはあくまで、精神的な話であり肉体的なものではないのです。肉体はすぐに適応など出来るものではありません。それこそ、何百、何千と長い年月を掛けてやっと変化をするものなのです。だいたいこの状況を考えてもみてください。近くには溶岩が流れていて、しかもここは閉鎖的な空間であり、もちろん熱気が篭っていくんですよ。その熱気は容赦なく戦闘後の俺とメリリアさんの体力を奪っていくわけであり、このままこの場にいては他の魔獣たちに襲われる可能性だって考えられるんです。簡潔に言うと危険な場所なんですよ。いえいえ、決してドラゴンがいたから近くの魔獣たちは逃げ出して比較的安全なわけが無いじゃないですか。ホントデスヨ？オレハウソツキジャナイデスヨ。とにかく、人は暑いのはダメな

んです。寒いのは大丈夫かもしれませんが、暑いのはいけません。
ダメ、絶対！
要はそんな人間である俺がこの暑さから逃げるのは本能であり、決して俺がクーラーに頼りまくっていたせいで暑さに弱くなったからではないのである、と断言しておこう。
などと、どうでもいいことを考えていると、メリリアさんが何やら透明な球体を取り出していた。大きさはテニスボールくらいだろうか。ディエスタさんの持っていた水晶よりも透明で、見た感じではガラス球に思える。
「〈魂回収（ソウルリカバリー）〉」
メリリアさんが唱えると、紅い火の玉のようなものがさっきまで《火炎龍（フレイムドラゴン）》がいたところに現れて、ガラス球の中に納まった。ガラスは無色透明から、透明の赤色に変わっている。
え、何？何だか重要なことっぽいんだが、全くもってわけが分からない。
「メリリアさん、それは？」
「これですか？これは〔魂球（ボール）〕と言って、討伐をした魔獣の魂を溶ける前に回収するものです。これがないと、ギルドでは正式に討伐したとは認めてくれませんので、討伐の際は気をつけてください」
なるほど、討伐の確認は魔獣の魂を使って行われるらしい。確かに、魔獣を狩ったと言われても、本当に狩ったのか確かめないと報酬は渡せないな。
メリリアさんの言葉から察するに、魂は時間が経つと溶けてしまうらしい。それなら偽造は難しいと思える。

「へぇ、ボールってどこで手に入るんですか？」

「〔魂球（ボール）〕はギルドで販売されています。〔魂球（ボール）〕には、強力なプロテクトが掛けられているので詳しいことは分かっていませんが、どうやら死霊魔術（ネクロマンシー）が使われているようです」

ボールの製造法はギルドの秘密。で、市場の独占か？いや、それは早計だな。死霊魔術を使うやつが、正体を広めたくないだけかもしれない。

何（いつ）れにせよ、今ここで考えるべきことではない。なぜなら、暑いのだから。

「……そうでした。タツヤさんは記憶がないのでしたね」

メリリアさんは思い出したように呟いた。俺がボールを知らなかったから、そんなことを思い出したのだろう。騙している罪悪感がないわけではない。

「突然、どうしたんですか？」

「いえ、記憶喪失というのに竜種（ドラゴン）にも臆（おく）していないようでしたから、タツヤさんが記憶喪失だということを忘れていたんです」

あちゃー、ミスってしまったか？まぁ、普通に考えて初見でドラゴンに臆しないやつなんて……あんまり、いないだろう。うーん、今後もメリリアさんと行動を共にするのなら、正体は早めに言っておくべきかもしれない。

……変人として、処理されそうな気がしないでもないが。

「いやぁ、無我夢中でしたから」

苦しい言い訳だが、メリリアさんはあまり気にした様子もなく笑顔を向けると、もと来た道を進み始めた。あの様子だと、俺が嘘をついているのはばれているだろう。それでも詳しいことを聞いてこない。やはり、メリリアさんは良い奥さんになれると思う。

俺は遅れないようにメリリアさんの後ろに付いていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「そうか、影が薄いんだ！」

「えっと……いきなり、どうしたんですか？」

夜、俺とメリリアさんはクエストから戻ってきて、今はギルドにいた。クエストの帰りは特に何も無く、普通に馬で帰ってきた。総時間は、おおよそ8時間。しかも、ほぼ全てが移動時間である。確かに俺は明日までに終わるクエストだとはお願いしたが、まさか半日も掛からずに終わるとは……。

まぁ、早く終わったことはいいんだが、俺はギルドに戻って機嫌が悪くなっていた。相変わらず、ギルドに入った途端に静寂は訪れるわ、周りの視線はあるわでイラッとしない訳がない。それでも、今は少しだけ機嫌が良い。

理由は受付嬢にあった。

「いや、何だか受付の方に違和感を覚えていたんですけど、その正体が分かったので」

クエストに行く前から何か違和感を感じてはいたのだが、再び見るとすぐに分かった。ここにいる誰よりも———俺が知っている誰よりも、存在感が薄い。いや、この場合は“朧(おぼろ)げ”や“幽(かす)か”というべきだろう。

違和感とは、彼女の存在そのもの。元から存在感の薄い人はいる。そのことに違和感を感じているわけではない。俺が感じている違和感とは、彼女が意図的に存在感を薄くしていることだ。

完全に存在を消せば逆に怪しまれる。だから、存在感を人の意識から少しだけ除外するレベルで薄くしている。そんな印象を受ける。

「違和感ですか？」

メリリアさんは受付嬢を見るが、受付嬢は特に反応することもなくただ笑顔でこちらを見ている。普通のリアクションだ。俺に影が薄いと言われて、それに笑顔で対処する受付。そう、普通だ。

だが、この場においてはそのリアクションは“普通”ではない。なぜなら、メリリアさんはギルドにおいて、良くも悪くも注目されている存在であると思われる。そのメリリアさんに“普通”の反応をする。それがどんなに異常なことか。

受付嬢は、意図的にあまり目立たないようにしているようだ。俺も似たような状態なので、無闇に注目を集める気はない。……いや、メリリアさんに関しては手遅れ感が否めないが。

「いや、何でもないです。独り言なんで気にしないでください」

「？そうですか」

メリリアさんは首を傾げながらも、それ以上の追求はしてこなかった。こちらとしてはありがたいが、メリリアさんはそろそろ人を追求することを覚えないと、後々に面倒なことに巻き込まれると思う。

でも、メリリアさんは分かった上で敢えて聞いていない気もする。うーん、謎だ。本気なのか、態となのか。まぁ、どちらにせよ、メリリアさん以外に頼れる人がいないんだし、何かあったらその時はその時だ。

この後は、明日の夕方まですることはない。夕方は貧困街にいかなければならない。貧困街に行くのなら、少しだけ早めに家を出るべきだろう。だいたいの道順は覚えている……はずだが、念には念を入れる。間に合いませんでした、なんてとんだ笑い種だ。

あ、そうだ。ディエスタさんに借りてる魔術書があるじゃないか！

メリリアさん家に行って、それを読もう。

「取り合えず、メリリアさん家に行きましょう」

俺はメリリアさんを促して、ギルドから早々に立ち去ろうとする。

さすがにこれ以上の視線は、俺の堪忍袋の緒が限界だ。好奇の視線に晒されて嬉しいやつなんて、余程限られた感性を持つ人間だろう。

メリリアさんは俺の不機嫌を察したのか、それともメリリアさん自身も視線が嫌なのか、俺の言葉に頷いて肯定の意を示してくれた。

それを確認すると即座にギルドを後にする。ちなみに、受付嬢の視線はとっても痛かった。

2人でギルドから歩き始める。夜空は曇っていて、初日のような綺麗な夜空は見えない。見たところ雨が降りそうな気配はないが、夜空が見えないのは残念だ。そう言えば、こちらの世界には月らしき衛星は見当たらない。月は欲しいよな……2個くらい。

2人の間に会話は無いが、気まずいみたいな空気ではない。いや、メリリアさんが異常にこちらをチラチラと見て来るとか、何だか独り言を言っているとか、そんなことは些細なことだ。

頬を撫でていく風は冷たいが、少しだけ熱くなっていた頭には丁度いい。やっぱり、視線にはいつになっても慣れない。というよりも、

どちらかと言えば段々と敏感(びんかん)になっている気がする。元の世界では、注目を浴びないようにしてたから、視線を感じるのは久しぶりなのが原因なのかもしれない。
ふと周りを見ると、カップルなのか男女一組でいる者が多くいた。それらの人々は完全に2人だけの世界に入っており、近くを通る俺たちに視線を向けるようなことはしない。完全に意識の外にあるようだ。
恋人ねぇ。俺は恋人が出来たことなどない。ま、仕方ないといえば仕方ないのだが。元々、人と距離を取るように接してきたし、特別にカッコいいという訳でもない。俺が誰かと恋仲になる要素なんてゼロだ。

「ふぅ」

思考がマイナスのことを考え始めた。俺は息を吐いて、一度思考を真っ白にする。昔からの癖だ。思考が行き詰ったり、どうしようもない状況に陥(おちい)った時に息を吐いて思考を整える。祖父の教えでもある。どんな状況でもきちんと把握しなければ、間違いをしでかす可能性がある。状況を正しく認識するために頭を真っ白にするのだ。
真っ白な頭で、再び周りを見る。……どうやら、俺は本気でストレスを感じていたようだ。後方に視線を送っている者がいる。いつからなのかは分からないが、おそらくギルドを出た直後からつけられていたのだろう。こんな視線にも気づかないなんて。
さっきの悩みは気のせいだったかもしれない。視線に敏感だったら、こんなに気配を感じられる視線に気づかないわけが無い。思った以上に俺は過去のことを引きずっているようだ。我ながらなんと軟弱な心だろうか。
周囲を他に気配がないと探ると、右側にさらに気配を感じた。人数は1人だが、後方に位置している者たちよりは、遥かに気配の消し方が上手い。こちらの世界に来て五感が優れていたので気づけたが、

そうでなければ決して気づかなかっただろう。

さて、今は自分のことよりもこの視線をどうするかが問題である。メリリアさんは先ほどと変わらず、独り言を呟いているようである。クエスト時とは大違いだ。さすがにメリリアさんも街中では警戒を薄くしているのか。

クエストの最中のメリリアさんなら、即刻で気づけるほどの視線。まぁ、それくらいならどうにでも出来そうな気はするが。いや、油断はいけない。慢心や油断といったものが、大きな失敗に繋がるのだ。

気配の数は全部で3人。後方に2人に、右側に1人。殺気や敵意は特に感じられない。気配の消し方から考えても、後方の2人はそこまでの実力者ではない。しかし、これが偽装の可能性もある。態と気配を悟らせ、大したこと無いと油断させた上での奇襲。もしくは、こちらは囮で本命が潜んでいる可能性もある。いや、右側が本命の可能性が高いな。と言っても、情報が少ない中で考えても特定は出来ない。

俺はいつでも抜刀できるようにしながら、ストーカー（この表現は間違ってないはず）との距離を測る。後方は距離は１０ｍ前後、右側は３〜４ｍくらい。どちらも間合いのうちではある。そのことを確認すると、取りあえずは普通に歩く。

しばらく歩いていると、メリリアさんも気づいたのか表情が少しだけ硬くなる。メリリアさん家までは、このままの速度だと１０分も掛からずに到着するだろう。ストーカーの目的は分からないが、このままだとクラシスさんやメチルさんに迷惑が掛かるかもしれない。俺がメリリアさんを見ると、メリリアさんも同じ懸念をしていたのか俺に瞳だけで訴えかけてきた。俺は浅く頷き、肯定の意を示す。それを見ると、メリリアさんは帰路とは別の道を進み始めた。俺は当然のようにメリリアさんの後ろを付いていく。

ストーカーは、特に何のアクションもせずに俺達を追ってくる。メリリアさんは段々と人気の無い場所へと向かっていく。どうやら、ストーカーを捕まえる気らしい。人気の無い場所で襲ってきたところを迎撃するつもりなのだろう。

裏路地に入って、角を2、3曲がると辺りの人の気配はほとんど無くなっていた。おそらく、街でも治安の最も悪い場所の一つなのだろう。ゴミや動物の死骸まである。見たところ、人間の亡骸はないようだ。

俺は臭いに少しだけ顔を顰める。臭い。とてつもなく臭い。死骸だけではなく、その他の生ゴミや他の何かの臭いがする。何なのかは特定できないが、とてもひどい臭いを放っている。

メリリアさんは立ち止まり、気配のほうを見た。俺もそれに習って、気配のほうを向く。逃走を図ってもいいように、いつでも追いかけられる体勢を整えておく。ストーカーは未だに動かない。

こちらの行動を監視しているので、俺達がストーカーたちの方を見ていることに気づかないわけが無い。しかし、ストーカーたちからは何の反応も無い。逃走をしようとしている訳でもなく、かといって殺気がある訳でもない。

「……そろそろ、出てきたら如何ですか？」

メリリアさんが痺れを切らしてストーカーに声を掛ける。すると、角から2人が出てきた。1人は大柄で筋肉質な男。もう1人は魔術師のようなローブを被っている。どうやら、残りの1人は出てこないようだ。

男とローブさんは、どこか落ち着きが無い様子でメリリアさんの方を見ていた。何やらとても緊張をしているようだ。見ている感じでは、害もなさそうだしメリリアさんに用事だというのなら、俺はこの場にいない方が良いのではないだろうか？

俺がどうするべきか悩んでいると、男が意を決したように声を出した。

「メリリア・リス・コーティス殿とお見受けする」

「はい、私はメリリアです」

そら、ストーカーしてるのに対象が別人だったらダメでしょ。こういうのをお約束というのだろうか？違うか。

「コーティス殿に折り入って頼みがあるのです。どうか我ら【赫き牙（クリムゾンファング）】に所属していただきたい。無論、優遇はいたしますし、魔道師団の方を優先していただいて結構です。何卒、ご検討ください」

どうやら、男達の目的はメリリアさんの勧誘らしい。と言っても、一体何に勧誘しているのかは知らないが。クリムゾンファングとか言ってたな。朱色の牙って何？それって牙の病気じゃないだろうか。

「そう言ったお話は遠慮させていただいておりますので、お引取りください」

メリリアさんは丁寧な口調で拒否をする。メリリアさんの言葉から察するに、こう言ったことは初めてではないようだ。一体、何の勧誘なのか気になる。宗教……じゃないな。クリムゾンファングなんて、攻撃的な宗教はダメだろ。

「……分かりました。しかし、理由だけはお聞かせ願いたい。さすがに我々もこのままでは帰れない」

「そう……ですね」

メリリアさんは一瞬だけこちらを見ると、何やら考える仕草(しぐさ)をする。
俺のいる方向には気配なんかは感じないが、もしかしたら俺が気づいていないだけかもしれない。俺はすぐに意識を後ろへと集中させて、気配がないか探る。
しかし、探しても特には気配も感じない。何か魔法を使われているのだろうか。それならメリリアさんが気づいたのも納得である。俺は未だに魔法については素人以下だ。いつでも動けるようにだけしておく。

「理由は、私が弱い人を護れるほどに強いわけではないからです」

空気が凍った。

第6話　勧誘（後書き）

誤字・脱字など御座いましたら、報告願います。
感想・批評を書いていただければ嬉しいです。

第7話　魔術の創造者

俺は昔から人付き合いをほとんどしない人間だった。つまり、人付き合いの仕方なんて経験はないに等しい。どうやったら上手くいくのか、どうしたら相手に好かれるのか、何てことは全く知らないし分からない。あ、でも、相手の感情が変化したというのは分かる。そんな俺でもメリリアさんの言葉の意味は理解できるし、そんなことを言って相手が気分を害することなんて目に見えている。

「…つまり、コーティス殿は我々が弱いから【赫き牙（クリムゾンファング）】に入る気がないと。そうおっしゃっているのですね？」

相手の雰囲気が変化した。さっきまではメリリアさんに遠慮したり、怯えている感じだったが今は完全に怒っている。男もだが、隣のローブさんも少しだけ雰囲気が変わっていた。うーん、どんな魔法があるのか分からない以上、あまり対峙（たいじ）したい相手ではないんだが。メリリアさんもそんな2人の様子には気づいているようだが、こうなることは予測していたのだろう、表情や態度に変化は見られない。……なら、あまり相手を刺激するようなことは止（よ）して欲しい。俺はあまり目立ちたくないんだ。目立った結果、色々と質問をされうっかりと「異世界から来ました」とか言ったら、絶対に頭を心配される。……いや、もしかしたらこっちの世界にはそんな魔法があるかも？

「ええ、そういうことです」

「…ふ、ざけるなよ」

男の口調が変化した。さっきまでの丁寧な口調じゃなくて、その体格に相応(ふさわ)しい荒々しい口調。微妙に声が震えていることから、キレたのではないかと予測できる。暗くて色までは分からないが、男の顔は真っ赤になっているだろう。
何の勧誘かは未だに分からないが、弱かったらダメらしい。そして、男たちは強いことに誇りを持っているらしい。一体、何の勧誘だ？闘技場の出場チームとか？いや、闘技場とかそんなものはなかった気がするが、昨日ここに着たばかりだし断言は出来ない。

「俺達はチームでも最強の異名を持つ【赫き牙(クリムゾンファング)】だぞ！それが弱いだとっ！！王家直属の魔道師団団長様だか何だが知らねぇが、ふざけた事を抜かすんじゃねぇぞ！！」

予測通り、男の堪忍袋の緒が切れたようだ。地面を蹴ってメリリアさんに直進する。メリリアさんは特に回避する気がないようで、何のアクションも起こさない。いやいや、それは拙(まず)いでしょ。
俺は男よりも早く移動し、男とメリリアさんの間に入る。男を見ると驚愕した表情でこちらを見てはいるが、速度を落とす気はないようだ。というよりも、落とせないといった表現が正しいだろうか。
男の手元を見ると、武器は右手に持ったナイフ。これは油断ならない。ナイフと言うのは、接近戦でかなり有効な武器である。小回りが利くというのもあるし、上手いものなら一瞬でも逃げようとした相手に投擲(とうてき)という手もある。
俺は抜刀はせず、ナイフを左腕で上に逸らし右手で男の鳩尾に一撃を加える。男のスピードと相俟(あいま)って中々の威力の一撃になった。男は声を上げる間もなく、地面に倒れた。上手く加減できたようだ。加減できなかったら、おそらく男の体がここら辺に拡散することになっていただろう。

ローブさんは何かしようとしていたが、俺は一瞬で距離を詰めて同じように鳩尾に一撃を加える。ローブさんは男と同じように地面に崩れ落ちた。この間、約2秒。……ホントは3秒。少しだけ見栄を張りました。

2人は完全に意識を失っているようで、ほぼ無力化したと考えていい。残るは、この2人が攻撃を加えられたのにも関らずに、何のリアクションもしようとしないもう1人である。こちらの様子は把握しているくせに、一向にどうする気もないようだ。

ならば、と仮説を建てる。1つ、あくまで監視が目的であり、俺達と接触をする気はない。2つ、気絶してる2人とは無関係である。3つ、攻撃を加えるため、俺達に確実な隙が出来るのを待っている。可能性が高いのはこれくらいではないだろうか。追跡の技術なんかを考えたら、2つ目の可能性が最も高い。

「〈周囲調査（サーチ）〉」

メリリアさんが火山で行ったのと同じ魔法を発動する。今度は地理を知るためではなく、辺りに他に仲間がいないか調べるためのものだろう。光の輪が周囲に広がっていく。その光は夜で辺りが真っ暗なのにも関らず、全く違和感がなかった。

メリリアさんの魔法が発動されると、残っていたストーカーは去っていった。あくまで観察が目的だったようだ。一応、必要以上に警戒されないように、隙を見せたりとか色々とやっていたが徒労だったようだ。

「周囲には他に何もないようですし、これで大丈夫だと思います」

「そうですか。それなら、帰りましょう」

俺は今日が初クエストということもあり、少しだけ精神的に疲労を

感じていた。その上にストーカーという事態も発生し、疲れない訳がない。つまるところ、早く寛(くつろ)ぎたいのだ。

「分かりました。けれど、この方たちをどうにかしないといけませんので、少しばかり待ってくださいね」

そう言えば、完全に思考の外だった。恐らく俺が1人で事態に当たっていたら、この2人はしばらくここに放置をされていただろう。しかも、ここは治安が悪いであろう場所。そんなところに、男はともかく女性(ローブさん)がいるのは拙(まず)い。メリリアさんが言い出してくれてよかった。

メリリアさんは腰の辺りから青いひし形の宝石を取り出した。どうやら、宝石を腰のところに固定していたらしい。取り出すときに他にもいくつかの宝石が見えた。どういった用途で何のために固定しているのかは分からないが、この状況をどうにか出来るモノのようだ。

「〈通信(コール)〉対象、バリス団長」

コール＝ｃａｌｌ＝電話する。完全に英語だ。言語が通じることに疑問がなかったかと言われれば、否と答えるしかない。だが、便利だったためそんな疑問はすぐに忘れた。忘れたが、今になって考えてみれば大分おかしなことである。

ウィンケージ、アイスワールド、サーチ。ウィン＝ｗｉｎｄ＝風、ケージ＝ｃａｇｅ＝檻(おり)。アイス＝ｉｃｅ＝氷、ワールド＝ｗｏｒｌｄ＝世界。サーチ＝ｓｅａｒｃｈ＝調査。まぁ、ネイティブっぽい発音だったからすぐに気づいたが、あまり突っ込まなかった。

魔法の発動が英語なのは、ほぼ間違いないと見ていい。今のところは、別段どうこう出来る訳でもないので地道に魔法に関する情報を集めていく。恐らく、元の世界に関する何らかの情報を得られるだ

ろう。帰るか帰らないかは別として、手段を選択肢が増えるのはいいことだろう。

「今、警備の方に連絡を入れましたので、この方達はすぐ保護されると思います。それでは、参りましょうか」

メリリアさんはいつの間にか全てを終わらせていたようで、気づいたらメリリアさんは家に向かおうとしていた。そのことに少しだけ違和感を覚える。メリリアさんならこの2人を放置せずに警備の人たちが来るまでは、ここで待っているのかと思っていたからだ。

「如何(どう)かしたのですか？」

メリリアさんは俺がついて来ないことを不思議に思ったのか、少しだけ進んだところで立ち止まり振り返っていた。俺は深く考えそうになる思考を停止させて、メリリアさんの方へと歩き始めた。

◆◇◆◇◆◇◆◇

現在、俺はメリリアさん家の俺に充(あ)てられた部屋にいる。部屋にあるベッドに腰掛けて、ディエスタさんから渡された本――『初心者でも大丈夫！魔術簡単習得！』を読んでいる。

これによると、魔術は自分の中にある魔力を他のモノへと変換すること、もしくは魔力を糧(かて)にして精霊を使役させることを指すらしい。例えば、魔力を氷に変える、精霊に氷を作り出してもらう。どちらも結果は同じだが、状況によって使い分けが必要なのだ。

魔力を変換するのは多く魔力を消費するが、威力や範囲を正確に行うことが出来る。逆に精霊に使役するのは威力や範囲が正確でないが、魔力をあまり消費しない。どちらも一長一短である。

ディエスタさんに教えてもらっていたが、魔術には属性が存在する。『基本属性（ベーシック）』は〈火〉〈水〉〈風〉〈土〉〈雷〉、稀な属性として〈光〉〈闇〉がある。しかし、これは基本属性である。

他にも『合成属性（シンザシス）』というものがある。合成属性とは基本属性（ベーシック）の組み合わせで、異なった効果を生み出す属性である。例えば、〈氷〉だ。この属性は〈水〉と〈風〉の組み合わせだ。

また、合成属性（シンザシス）と言っても、それぞれの属性の比率によって効果は大きく変わる。〈氷〉の魔術の場合、〈風〉の属性を強くすれば、〈氷〉ではなく〈水竜巻（トルネード）〉や〈暴風雨（ストーム）〉といった魔術が発動するらしい。

そして、どの属性にも分類されないが『無属性』になる。身体強化、治癒魔術の他に召喚魔術、契約魔術、呪術、死霊魔術（ネクロマンシー）など、要は“その他”という認識で間違いない。しかし、無属性魔術はあまり好かれてはいないようだ。その理由は、無属性が先天的なモノであるからだ。

無属性以外の魔術は得手（えて）、不得手（ふえて）があるにしろ、訓練をすれば最低でも形にはなる。しかし、無属性の魔術は最初から出来る出来ないが決まっている。使えない人は一生使えないし、使える人はすぐに使えるのだ。

努力をしている魔術師から見れば、それはとてもふざけた話である。自分達が努力して魔術を習得するのに対して、無属性の魔術は努力をあまりしなくても使えるのだ。こんな魔術を好きになれるだろうか、いや多くの人は好きになれないはずだ。

「そして、俺はその無属性が得意属性なわけだ」

本を読みながらついつい、呟いてしまう。こればかりは仕方がない。自分の得意属性が多くの人に好かれていないなんて、そんなバカな話があるだろうか。いや、現にこうしてあるわけなんだが……。ダメだ、涙が……。

俺が1人で悲しんでいると、ドアがノックをされた。どうやら、本に集中して辺りに対する注意が散漫になっていたようだ。もしくは、相手が自分を上回る実力者ということもありえるが、態々ドアをノックする意味はない。

「メリリアです。少しいいですか？」

「あ、はい。どうぞ」

ドアが開くと、今日着ていたマントを脱いで、薄い水色のワンピース姿のメリリアさんがいた。ヤバイ。何がヤバイって、俺は女性に対する免疫なんて皆無ってことですよ。ついつい、顔を赤くして逸らしてしまう。いや、仕方ないだろ。

「あら、タツヤさんは魔術文字（イングリッシュ）が読めるんですか？」

「英語（イングリッシュ）ですか？えっ、あ、う？あれ？何で読めてるんだ？」

俺は本を見ながら混乱し始めた。ギルドの登録の時は、こちらの世界の文字は読めなかった。しかし、今は読めている。いや、メリリアさんはこの文字を英語（イングリッシュ）だと言った。ということは、この言語は本来の言語ではないということだ。

というか、気づけよ、俺！

「どうやら、タツヤさんは記憶がなくなる前は多少なりとも魔術を齧(かじ)っていたようですね」

「どうしてですか？」

というよりも、さっきから英語(イングリッシュ)と言っているがどう考えても、俺が読んでいる本は日本語(ジャパニーズ)だ。ダメだ、余計に混乱してきた。

「魔術文字(イングリッシュ)は、昔にある1人の異世界人の方がいらしたそうなんですけど、その方が魔術の基礎を作り上げたことが理由とされています」

……え？

「その方は異世界で使われた言語である魔術文字(イングリッシュ)を使って魔術の基礎を作ったので、魔術を使う際は魔術文字(イングリッシュ)を使用するんですよ」

待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！異世界人ってまんまじゃないか！英語(イングリッシュ)ってことは最低でも英語圏の人だ。つまり、俺の住んでいた世界の可能性がある。世界は1つとは限らないし、似たような世界という可能性も完全には否定できないが、それでも可能性はかなり高い。

「つまり、魔術文字(イングリッシュ)で書かれた本を読むことが出来るタツヤさんは、最低でも魔術文字(イングリッシュ)を習得していることになります。そして、魔術文字(イングリッシュ)を使うのは魔術関係だけなんですよ」

オーケー、落ち着こう。確かに何らかの手がかりがあるとは思っていたさ。これで何もなかったら、あまりにも絶望的過ぎる。だとしても、まさか魔術の製作者が異世界人だったとは予想外過ぎるだろ

う。
だが、ありがたい情報であることは間違いない。“過去にも異世界から誰かがこちらに来ていた。”これほど、重要な情報も少ないだろう。色々な可能性が推測されるが、これでもまだまだ情報が足りない。
この際だ、メリリアさんに本当のことを言うべきだろう。ここまで俺に付き合ってもらったのだ、言わないほうが礼儀に反するだろう。
「メリリアさん、俺も異世界人なんです」

第7話　魔術の創造者（後書き）

誤字・脱字などの報告は大歓迎です。
感想等を教えていただくと、とても嬉しいです。

第8話　異世界人の存在意義（前書き）

最近、分が短い気が・・・
こ、今度は長いのを書くので今回までは見逃してください。

第8話　異世界人の存在意義

さて、とうとう俺が異世界人だとぶっちゃけた訳なんだが、どうしたものか。メリリアさんは俺の方を向いたまま、静止している。完全に静止している。呼吸はあるが、目をパチパチさせてこちらを凝視している。

「……」

無言が辛い。まだ、驚愕して声を出してもらったり、冗談だと言って笑ってくれたほうが楽である。無言は、相手の感情を読み取る情報が減るということになる。読み取れる情報が減れば、次はどのような行動をすればいいのかの選択肢も、間違ったり減ったりする。

「あの、何か反応をしてくれたら嬉しいんですけど……」

取り合えず、反応を促してみる。が、メリリアさんは突然、真剣な顔つきになり何かを考え始めたようだった。急に真剣になるものだから、ディエスタさんの時のように嫌な勘しかしない。

「……冗談、ではないんですね？」

「は、はい」

あまりの真剣さに少しだけ気圧(けお)される。これが王家直属の力か…。って、違う。少しだけ現実逃避を始めた頭をどうにか元に戻す。今はメリリアさんの反応があるまで大人しくしていよう。

「……仮にタツヤさんが異世界人だった場合、状況は最悪です」

さ、最悪ですか…。何だかこっちの世界に来てからは、いいことが何一つとして無いような気がする。これが俺の運命なのだろうか？そんな運命は絶対に嫌なのだが…。

「今、この国――“フェルテイナ王国”は、隣国である“ヴァトラス帝国”と緊張が高まっている状態にあります。私がメリオ村からこっちに引越ししたのも、それが原因なんです」

つまるところ、戦争が起きそうで互いに気が立っているのか。政治は素人なのであまり分からない。国家間のやり取りとなると尚更だ。

「“フェルテイナ王国”と“ヴァトラス帝国”では、圧倒的に“ヴァトラス帝国”の軍事力が上です。しかし、“フェルテイナ王国”は大陸最大の国である“アルトバル聖国”の属国と言っても過言ではないので、“ヴァトラス帝国”は迂闊に手を出すことが出来ずに、今まで膠着状態でした」

フェルテイナ王国の力は弱いが、後ろにアルトバルセイコクがいるのでヴァトラス帝国は怖くない。つまり、虎の威を借る狐ってわけだ。

「しかし、そこに異世界人が現れたことにより、状況は大きく変化する可能性が高まりました。前の異世界人の方は“アルトバル教”が異世界人と認めなかったのです。異世界があるということは“アルトバル教”の崇める神たち以外にも神が存在することとなり、それは“アルトバル教”の否定に繋がります」

アルトバル教――おそらく宗教――は、自分達が知っている神がこの世界を創造したとか崇めているのだろう。しかし、異世界人という者が現れた。それはその宗教の根本を否定することになる。だから、認められないってことか。

「今の状況で異世界人(タツヤさん)を“フェルテイナ王国”が肯定すれば、自ずと“アルトバル教”は“フェルテイナ王国”から離れていくでしょう。仮に異世界人を名乗る者ということで否定し、殺そうとでもすれば“ヴァトラス帝国”に攻め入る口実を作ることになります。『無害な一般人を殺した』として」

暗に異世界人(おれ)はいるだけで迷惑と言うことになるのか？……俺は鬱になってもいいはず。何が悲しくて存在を否定されなあかんのだ。ダメだ、あまりのショックにキャラがぶれて来た。

「つまり、タツヤさんは記憶喪失ということです」

「……了解しました」

非常に不本意だが、俺が原因で戦争が始まるなんて嫌過ぎる。俺が異世界人ということを黙っていれば平和らしいので、このまま一生の間黙っていようと思う。いや、帰れる可能性がないわけではないが。

「あっ」

「どうしたんですか？」

メリリアさんが突然、不安になる声を上げた。『あっ』はダメだと思う。割と真剣に。絶対によくない方向だから。

「いえ、夕食が出来たので呼びに来たんですけど、すっかり忘れていました」

少し、安心した。

◆◇◆◇◆◇◆◇

黄昏時の町並みは、どこか胸を寂しくさせるものがある。俺はこの時間帯が一番苦手だ。街全体が茜色に染まっていき、まるで街に血が降り注いだかのように思わせる。その光景は記憶の奥深くにある記憶を思い出させるのだ。……思考がこんな風にマイナス方向に向かう原因なのも理由のひとつだ。

「お？兄ちゃん、早いな」

声の方向を見ると、荷車の前に立っている男がいた。荷車には檻が積んであり、昨日と同じように布が掛かっていた。そう、俺は奴隷商人との取引に来ていた。昼にはここに来ていた。それからずっとここで待っていたのだが、ここは地球よりも一日の経過が遅いのでかなりの時間を過ごしてしまった。

「……」

「…まぁいい。それで金は準備出来たんだろうな？」

俺は、無言で懐（ふところ）から袋を取り出し、その中から銀貨１２枚を取り出した。ちなみにクエストの成功報酬は白金貨３枚だった。銀貨への換金を頼んだら、白金貨１枚で銀貨１００枚分らしかった。話を聞

く限り、白金貨1枚が金貨１０枚、金貨1枚が銀貨１０枚のようだ。なので、メリリアさんの助言で報酬は白金貨2枚、金貨8枚、銀貨２０枚にしてもらった。
男は俺の出した銀貨を見て、満足そうに頷く。その後、男が声を掛けると通りの角から1人の屈強な男が出てきた。男は、檻に掛かっている布を取り払う。檻の中には銀髪の少女が光の無い瞳でそこにあるままだった。

「本来なら金を先に払ってもらうんだが、今回は特別に商品を先に渡す。確認が終わったら金を渡してくれ」

男はそう言うと、道の端に移動し壁に背中を預ける。男は屈強な男にも声を掛けて荷車から離れされる。俺はその行動を見ると、荷車のほうに近づいていく。男の前を通るときにチラリと男を見たが、不敵に笑っており感情は上手く読み取れなかった。
檻の前まで行くと、少女の瞳を見つめる。近くで見ようと、遠くで見ようとその表情に変化はない。どうやら、俺という存在自体にはあまり興味がないようだ。いや、興味を持っても無意味だから、無視をしているというべきなのだろうか。

「ああ、檻の鍵は開けてある。中から取り出して確認してもいい」

その言葉を聞くと、檻の扉がある荷車の後ろへと移動し檻の扉を開ける。少女は扉を開けても何のリアクションもしない。これは、困った。

「おいで」

俺は出来るだけ優しく声を掛けた。少女はゆっくりとした動作でこちらの方へと顔を向ける。その顔に初めて感情が見える。

“どうして？”

疑念。ただ純粋な疑問だろう。なぜ、自分が呼ばれているのかと。男の話を聞いていると、この子は幼いときに男に買われ、男によって育てられたのだろう。だからこその疑問。今まで買われることの無かった自分をどうして買うのかと。……いや、微妙に違う。どうして自分を買うことが出来るのか、かな？

何れにせよ、俺が取る行動は変わらない。少女の方へと手を差し伸べる。少女はさらに疑問を顔に浮かべ、差し出した俺の手を見つめる。

「おいで」

少女は自分の右手をゆっくりと俺の手に近づけていく。俺の手に触ろうとする直前にその動きが一瞬だけ止まる。その手は躊躇うように一瞬だけ引くが、意を決したのか俺の手を握る。俺は少女を檻から引っ張り出した。

「確認は終わったか？」

その質問に、俺は無言で頷き肯定の意を示す。

「それじゃ、金を頂きますか」

俺は袋を取り出し、男のほうへと投げる。男はそれを受け取ると、中の確認をする。その間、俺は動かずに男の動作と周りにいる男達の動きに警戒していた。確認が終わったのか、男が顔を上げる。

「確かに銀貨１２枚、全部あるな。それじゃ、今後も贔屓にしてく

れよ」

男はそういうと、辺りに声を掛ける、すると、通りのいたるところから屈強そうな男たちがぞろぞろと出てきた。おそらく、金を払わずに逃走をさせないためだろう。

男は屈強そうな男達に命令し、荷車を押させ始める。どんどんと進んでいき、すぐに後姿は見えなくなった。俺は男が視界から完全に消えたのを確認し、少女を連れてこの貧困街（スラム）から離れていった。

第8話　異世界人の存在意義（後書き）

誤字・脱字などありましたら、ご報告願います。
感想・批評等は大歓迎です。

第９話　魔法訓練開ｓ…（ほぼ）終了（前書き）

長く・・・長くするって言ったのに！！
前と殆ど変わらない文字数です。

くっ、次回こそはっ！

ＰＶ１３４，０００以上、ユニーク２２，０００以上。
感謝です！！感謝ですが、一言。

「何があった！」

第9話　魔法訓練開s…（ほぼ）終了

俺は今現在、すごく真剣な悩みに直面している。

「この子のことをどう説明しよう」

奴隷（ソフィア）の子――名前が無かったので俺が名づけた――は目の前でご飯を食べている。満足な食事が出来ていなかったようなので、取り合えずメリリアさん家に連れて行く前に食事をさせることにした。

別にソフィアがどう考えても体積以上に飯を食べていたとしても、今はいい。今、重要なことは、メリリアさんにソフィアを何と説明するのかだ。さすがに、拾って来たは拙い気がする。……メリリアさんならそれでも納得しそうだが。

「でも、考えてみると正直に話さない理由がないんだよな」

そう、ソフィアのことを誤魔化すと考えていたが、冷静になって考えてみると誤魔化す理由はない。別に悪いことはしてないはず。……ん？人身売買やってるじゃん。

だが、人身売買で俺が非を受けるだけなら、特別どうというものはない。そのまま説明をすればいい。問題は本当にメリリアさんに迷惑が掛からないのか、ソフィアに対する大きな問題が発生しないか、ということなんだよな。考え得る限りでは問題ないだと思うんだが、ここはあくまで異世界であり元の世界の考えが確実に通用する訳ではない。

「よし、正直に話すか」

そうと決まれば、早めに行動しておきたいな。膳(ぜん)は急げと言うし。
ソフィアのほうを見ると……何だか凄いことになっていた。集中して考えると周りの細事(さいじ)はあまり気にしないし、無意識のうちに意識から除外しているのだが、目の前の光景を細事で片付けるのは人としてダメだと思う。
確かに体積以上に食べていたのまでは俺も見ていた。そこから次第に集中して意識から除外していたのだが、座っているとは言えども食器が人の身長を超えるなんておかしいだろ。そのタワーが左右に二つほど。
しかし、周りの客たちは特に驚いた様子は無い。案外、こっちの世界では普通の光景なのかもしれない。それにクラシスさんも大量に夕食を作っていた。ちなみに夕食は全て食べ終えた。主にメリリアさんが。うん、ビックリだよ。

「――――ゲプッ」

ソフィアは水を飲み終え、満足そうな表情をしていた。お腹いっぱい食べれたようだ。しかし、どういう訳なのか、痩せ細っていて不健康そうだったソフィアが、今では女の子独特の軟(やわ)らかさがあり、つい先ほどまでとは容姿がかなり違う。食事をしたからと言って、急にエネルギーを吸収することなどありえるのだろうか？
まぁ、異世界だから何が起こってもおかしくはないが。

「…どうして、私を？」

「気分」

そう、全ては気分だ。俺が奴隷(ソフィア)に絶望を教えたいと思ったから奴隷(ソフィア)を買ったのだ。他に意味はないし、絶望を教えること以外に目的はない。

「…どうして、買えた？」

意味が分からないぞ。奴隷商人は俺以外にソフィアを売らなかったのだろうか？いや、その可能性は低いな。奴隷商人は初対面の俺にすぐに売ろうとした。なのに、他のやつに売ろうとしない道理は無い。

「どういうこと？」

「…魅力、消す、魔法」

察するに、ソフィアには魅力を消す魔法が掛かっていたのだろう。魅力を消し、自分自身の価値を無くすことで買われるのを避けていたのに、俺はその魔法を無視してソフィアを買った。それはどういうことなのか……俺が一番知りたいわっ！

「すまん。俺には理由が分からない」

メリリアさんやディエスタさんなら、何か分かりそうな気もするが。

「…そ」

見た限りでは魔法が効かなかったことに対して、あまり気にしてはなさそうだ。表情の変化が乏しいから確証は持てないが、大きく外れていることは無いだろう。

「メリリアさん家へ行くか」

俺とソフィアは席を立ち、メリリアさんの許へと向かった。

ちなみに、ソフィアが食べた金額は銀貨４枚分だった。これは高いのか？

◆◇◆◇◆◇◆◇

「魔力が多いね。まだ下げな」

「ッ……はいっ」

言われたとおりに、魔力をさらに下げる。この作業は非常に面倒である。単純に下げるだけならいいのだが、俺はこの時点で既にかなり魔力を抑えている。つまり、ここから魔力を下げると言うのはｍｇ（ミリグラム）・μｇ（マイクログラム）・ｎｇ（ナノグラム）・ｐｇ（ピコグラム）の調整をするようなものだ。無理にも程がある。しかし、やってやれないことはない。

「ふむ、そのくらいだね」

「ふぅ、はい」

大きく息を吐き、今の魔力の量を覚える。もしも、もう一度集中して、最初からやっていくことになったら精神がもたない。だが、覚えておけば最初からやる必要はないので楽である。

俺は、ディエスタさんの店を訪れていた。ただ今の時刻は――分からないが、夜ごろで日が沈んでしまったことは確かだ。店の外からは未だに商人らしき元気な声が聞こえる。この時間帯まであんな元気なのはおかしいと思う。

「そんなに簡単に覚えられたら、えっと……弟子の立場がないね」

「完全に名前を忘れたでしょ？思い出そうとしたけど、途中で諦めましたね？あれですか、これが噂の弟子いじめですか？」

一応、ソフィアは一緒に来ている。最初はメリリアさん家で留守番をさせていようかと思ったのだが、よく考えるとメリリアさんは魔導師団の仕事で家にいない。メリリアさんは俺が異世界人だと知っているからいいが、クラシスさんやメルチさんはそのことを知らない。もしも、俺がソフィアを連れて行って色々と訊かれると、非常識を言う可能性が高い。そうすると、俺が異世界人だという事もバレる可能性がある。だから、メリリアさんが家に戻ってからソフィアは連れて行くことにした。

「まぁまぁ……えっと、ほら、ディエスタさんだって態とやってるんですよ、たぶん、おそらく、きっと」

「最後の方は弱気過ぎでしょっ！」

今はディエスタさんに魔法を教えてもらっている。初日と言うこともあり、最初は魔力を感じることが出来れば良い方という話だったのだが、すでに魔力を感じていることを伝えたら、魔力を制御する訓練に入った。取り合えず、初級魔法に適切な魔力を出せるように訓練をしていたのだ。

ディエスタさん曰く、魔力を籠めれば籠めるだけ魔法の威力は上がるらしいのだが、それではいつか魔法を失敗し事故に繋がる可能性があるので、威力を高めるよりも威力を抑える訓練からするそうなのだ。特に莫迦みたいに魔力量が多い俺みたいなのは。

「一先(ひとま)ず、訓練の第一段階は終わったよ。後は今の魔力を基準にして魔力を行使していけばいいのさ」

「あ、無視された」

「えっと、今のが初級魔法だから中級魔法が今の１０倍の魔力で上級魔法が１００倍、古代呪文(エンシェントスペル)が１万倍ですね」

魔力は覚えたから、これからは即座に出せるように練習が必要があるな。こればかりは慣(な)れなければ仕方ない。毎日、地道にやっていこう。

「ところで、第一段階と言いましたけど、第二段階は何ですか？」

「魔法を覚える」

これは当然だな。魔力の運用だけ覚えたとしても魔法自体を覚えなければ意味が無い。さすがに電気配線(まりょくうんよう)だけして、電化(まほう)製品を一切使わない馬鹿はいないだろう。

「第三段階は？」

「ない」

簡潔な回答ありがとうございます。

ない、と来ましたか。これだけだと、あまりにも簡単に魔法を使えるな。元の世界で使えないっていうのが冗談に思える程に。

「意外に楽だと思ったかい？表情に表れてるよ」

俺は反射的に顔を押さえた。その行動にディエスタさんは意地の悪い笑みを浮かべる。まさか、読み取られるとは思っていなかった。

「まぁ、本当は魔力を感じるのが魔法で二番目に苦労するところなのさ。お前さんは既に出来ていたけどね。そして、最も苦労するのが第二段階の魔法を覚えることさ」

え？そんなに難しいのだろうか。記憶力にはかなり自信がある。例えば、2ヶ月以内なら朝・昼・晩のご飯のメニューを覚えている。それにメリリアさんの呪文らしきものを聞いてる限りでは、そこまで長いものでもなかった記憶がある。

「あの本は読めたかい？敢(あ)えて魔術文字(イングリッシュ)の本を渡したんだけどね。魔術文字(イングリッシュ)は魔法を使う上で一番基礎になるのさ。私達の言葉と魔術(イング)文字(リッシュ)は言語の構成が全く異なる上に、覚えた語を唱えるだけでなく意味を理解して唱えないといけない。短くとも5年は掛かるね」

あれ？俺っていけるんじゃね？

第9話　魔法訓練開ｓ…（ほぼ）終了（後書き）

誤字・脱字などありましたら報告願います。
感想・批評などは大歓迎です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5993q/

異世界には刀の花束を

2011年8月3日19時56分発行